

**2009 年度 大阪大学
言語社会学会・言語文化学会
合同研究発表会
第 36 回大阪大学言語文化学会
大会資料集**

**日時：2009 年 10 月 22 日(木) 15:20 より
会場：大阪大学大学院言語文化研究科棟
旧棟 1 階大会議室
新棟 2 階大会議室**

目 次

研究発表 15:30-17:40

第1室：大阪大学大学院言語文化研究科新棟2階大会議室

1. アメリカの原子力政策1945-1948：
ヘンリー・ウォーレスの視点から
島本 マヤ子 (1)
2. ポスト冷戦期におけるブッシュ・ドクトリンの
戦略的意義に関する一解釈
伊藤 孝治 (5)
3. 聴覚に障害のある大学生英語学習者の支援
—多文化共生の視点から—
山岡 華菜子 (9)
4. シェイクスピア初期喜劇における
悪役の存在意義
飯盛 康史 (13)

第2室：大阪大学大学院言語文化研究科旧棟1階大会議室

1. いわゆる打消の助動詞「ず」について
吉永 尚 (17)
2. 中国領内のモンゴル系孤立的諸言語に見える形状語の特徴について
ヤマーフー・バダムハンド (21)
3. コーパスを利用した OVER の完了義の分析
大嶋 ルリ子 (25)
4. 「私」が夢見るブリュッセル
—オランダ語メディアで語るブリュッセル市民のライフ・ストーリー分析—
井内 千紗 (29)

アメリカの原子力政策1945-1948—ヘンリー・ウォーレスの視点から—

Henry A. Wallace and America's Atomic Diplomacy 1945-1948

言語文化研究科言語社会専攻 博士後期課程2年 島本マヤ子

本レジュメの構成

1. リサーチ・クエッション

ヘンリー・ウォーレス(Henry A. Wallace)が提唱した原子力政策は何故受け入れられなかったか

2. 先行研究の紹介と本報告の新視点

3. マンハッタン計画における科学者とウォーレスの接点(1940-1946)

4. ヘンリー・スティムソン(Henry L. Stimson)の原子力国際管理提案とウォーレスの支持(1945. 9)

5. ウォーレスの戦後核構想(1946.3)

6. Cold War Warriors への挑戦(1946.9-1949.1)

7. まとめと結論

問題提起:リサーチ・クエッション

現在の問題点: 核兵器およびその製造ノウハウは、核拡散防止条約(NPT)における非核保有国にまで拡散している。→核拡散は依然として防止できないのは何故か。

問題点の経緯: 「原子力の国際管理案」、スティムソン陸軍長官より提案される→ウォーレス商務長官(当時)支持。原爆の本質を理解できない閣僚、メディアは反対。→→対ソ不信が反映した「アメリカ案」に修正され、第1回国連原子力委員会に提出される。ウォーレスは、ソ連を原子力の共同管理者とする案を主唱するが、受け入れられなかった原因はどこにあったのか。

先行研究の紹介

- I. 冷戦正統派(Orthodoxy)の見解→ウォーレスは非現実主義者で政治的ナイヴェッテである。(Edward L. and G. Fredericks Schapsmeier, 1970¹)
- II. 修正主義者(Revisionist)の見解→ウォーレスの原子力外交(対ソ外交)を肯定的、好意的に評価。(Norman D. Markowitz 1973,² Richard J. Walton 1976,³ J. Samuel Walker 1976⁴)
- III. ポスト修正主義者(Postrevisionist)の見解→20年の空白を経て、ポスト修正主義者らが入手可能になった資料に基づき、ウォーレスの再評価が試みられ、より均衡のとれた、多角的な分析がなされた。ウォーレスのエニグマ性、宗教観なども分析対象となる。(Mark L. Kleinman 1991,⁵ Graham White & John Maze 1995,⁶ 安藤次男 1990,⁷ John C. Culver & John Hyde, 2000⁸)
- IV. 本報告の位置づけ→ウォーレスの原爆観や原子力外交に関して纏まった研究は今までなされていない。ウォーレスの「対ソ観」において重要なファクターをなす「原爆観」に着目。1946年後半から、支配的な秩序になりつつあった冷戦コンセンサスの中で、全く別の世界観をもつウォーレスの原子力外交を再評価する。

マンハッタン計画における科学者とウォーレスと接点

●先行研究では科学者との関連性は重要視されていない。ウォーレスの原爆観が形成される出発点として、ブッシュ(Vannevar Bush)科学技術庁長官ら科学者とウォーレス副大統領(当時)の面談に注目する。(ブッシュ文書⁹、ウォーレス回顧録¹⁰、Henry Agard Wallace Oral History¹¹)

(1) 2者会談(1940.6.29)

ブッシュおよびウォーレス、ウランウム235から引き起こされる核分裂について意見交換。

(2) 2者会談(1941.mid-July)

ブッシュ、1941年7月に英国の M.A.U.D. Committee(モード委員会)報告の内容に衝撃をうける。¹² ブッシュ、間髪をいれず、英米共同の原爆開発立ち上げるための対策をウォーレスと語りあう。科学技術に関して豊富な知識を持つウォーレスが、モード委員会の報告内容をすぐ理解したのでブッシュは安堵する。

(3) 3者会談(1941.10.9)

ブッシュ、ルーズベルト大統領およびウォーレスを訪問→政治家がマンハッタン計画にコミットした記念すべき日となった。マンハッタン計画が立ち上げられた後、ウォーレスは副大統領として Top Policy Group(最高政策グループ)の一員となり、資金調達に助力。開発はグローブス(Leslie R. Groves)将軍。

(4) 最高政策会議(TPC)会談(1941.12.16)

パイロット・プラントの可能性、資金調達などが話し合われる。ブッシュ、ウォーレス、スティムソン、マーシャル参謀長官出席。コナント国防開発委員会委員長は欠席。

(5) 2者会談(1942.12.21)

ブッシュ、ウォーレスに面会を求め、英米関係についてアドバイスをもとめる。

(6) オッペンハイマー博士(Robert J. Oppenheimer)と会談(1945.10.19)

オッペンハイマー(元ロスアラモス研究所長)、ウォーレスを訪問。バーンズ國務長官の(原爆を梃子にロシア人を威嚇する)原爆外交に失望したウォーレスに打ち明け、科学者らが抱いている危機感をトルーマンに伝えたい旨をウォーレスに相談する。ウォーレス同意する。

スティムソン提案とウォーレス

1. スティムソン、「原子力国際管理提案」(草案)を閣議に提出(1945.9.12)

①英国およびアメリカは原爆製造を規制し平和目的にのみ原子力を開発する。②ソ連と英国の同意を得た上でアメリカは核兵器の製造を中止する。③原子力の商業的、人道的利用の促進に向けソ連と情報交換する。④国連を通さず米ソ連と直接交渉する。

2. 閣議の二分分裂。→①原爆の秘密は国益である。他国と分かち合うことはできない。②原爆の秘密は国境がない。それ故、ソ連と共同管理するべきである。

3. ウォーレス、スティムソン提案を支持。

●「原爆の秘密をソ連に与えよ」とウォーレスが主張したとプレス・リリース。

4. 閣議での混乱を整理するため、トルーマン大統領、議会にメッセージを送る(1945.10.3)。

●「英米加3カ国原子力協定」締結(1945.11.15)→「スティムソン提案」を修正(ソ連の排除、原子力管理、国連に委譲とする)。

5. 「アチソン・リリエンタール報告」完成。(1946.3)

●原材料(ウラン鉱石など)の管理を国連に。→違反国は監視のみとし、ソ連を刺激しないよう配慮。→ウォーレス支持表明。

6. 「アメリカ案」(バルーク案)完成。(1946.6)

●違反国に対して段階別に罰則を強化。安保理常任理事国から拒否権を剥奪。→ウォーレス、対ソ強硬策であるとして批判。

7. ウォーレスの戦後の核時代構想

1. 原子力時代の意義(Significance of Atomic Age)トルーマン宛の手紙(1945.11.15 付)

●核分裂理論は欧州で発見され、核兵器製造技術は英国で先便がつけられた→アメリカ国の秘密としておくことはできない。国連を強化することにより、核兵器の管理、平和利用のための査察などの権限を、国連に委譲することを提案。→原子力エネルギーの中立化

2. A New Approach to Russia トルーマン宛の手紙(1946.3.14 付)

●ソ連はユートピアともいえるイデオロギーを旗印にしている→それ故、アメリカには潜在脅威と映る。→ソ連を共同管理のパートナーにするにはソ連との融和が必要となる。

●世界大戦を長い間戦って疲労したソ連は、国益を守るだけで精一杯であり、他国と戦う余裕も力もな

いはず。→国力が優位に立つ側(アメリカ)がリーダーシップをとり、ソ連にアプローチする。

●ソ連とイデオロギー上の相違はあるが、勢力圏の相互承認は可能。→米ソ共存は可能¹³→→経済民主主義に基づく、ソ連を含む自由貿易構想を提案→→The Century of Common Man「庶民の世紀」構想の具体化¹⁴

ウォーレスの冷戦戦士(Cold War Warriors)に対する挑戦

1. Madison Square Garden における演説。(1946. 9. 17)

ウォーレス、トルーマンの対ソ強硬政策、国連子力委員会に提出予定の「アメリカ案」を批判。→トルーマンの勧告により辞職。(1946.9.20) →→アメリカ案、安保理でソ連に拒否される。

トルーマンの声明→原爆はアメリカの聖なる信託財産。¹⁵ (アメリカは平和を守る場合のみ原爆を使用する。)→→他国の平和を守るためにも使用する? →→原爆独占の堅持。

3. ウォーレス、進歩党(Progressive Party)結成。大統領選に立候補((1947.12.29)

●マーシャル・プランに対抗してウォーレス・プランを発表。→復興資金を必要とするヨーロッパ諸国(ソ連を含む)に、国際復興ファンド(50億ドル)を国連に拠出。→→(軍事使用を除く)食料、燃料に対する助成金をローン又は無償の形で受領国に分配。

●原子力の管理を非営利団体の下に置くことを提案。

原子力エネルギーはアメリカ大企業経営者(銀行家、Wall Street men)に牛耳られている。→彼らは欧州への経済援助という名目で投資し、実際は彼らの利益として還元されている。→→彼らの発言権は軍事関連(原子力を含む)にも影響を及している。

4. 進歩党敗北(1949.1)、トルーマン再選へ (1938-1941)

●敗因は、①民主党内のリベラルは、保守リベラルの台頭により、分裂していた。②ウォーレスらリベラル左派は社会的、政治的基盤を失っていたこと。③アメリカ共産党が進歩党を推したため、ウォーレスが Communist dupe のレッテルを貼られた。→冷戦リベラルにとって有利に働く。以後ウォーレス、政界から去る。

まとめ

ウォーレスの戦後世界秩序構想

1. 米ソ2国間がイデオロギーを超えて協調することにより、政治的な勢力圏を相互承認する。

2. 経済民主主義に基づいた門戸開放による自由貿易。

ウォーレスの原爆観

1. 戦前から科学者との交流があり、正確な原爆知識を持ち、科学の国際性を理解していた。

2. アメリカは原爆を初めて使用したが故に、核の国際管理をする道義的な責任感がある。

3. 他国に対して軍事的、経済的に優位に立ったアメリカこそがリーダーシップをとる。

4. 爆弾によって保障される安全は国連加盟国の目標ではない。核管理は国際機関に委託されること。

むすび

核の国際管理をめぐる 1946-1947 年は、政府も国民も原爆保有国としての責任感から、アメリカは原爆独占をするべきかどうか揺れ動いた。¹⁶1947 年秋以降、冷戦コンセンサスが支配的に始めると、原爆は国益と見なされるに至り、米ソ共存による「ウォーレス計画」は冷戦緊張が高まる中で忘れ去られた。

ウォーレスの戦後世界秩序構想は、ひとつには、大国間の協調による政治的な勢力圏が相互承認されること、もうひとつは、経済民主主義に基づいた門戸開放による「ひとつの世界」だった。これらの二つの機軸が結合した世界秩序の中に、ウォーレスの原子力政策は位置づけられた。ウォーレスの世界観は、ウォーレスが戦前から科学者と交流があったことから、彼らと原爆観を共有しており、アメリカは核を初めて使用したが故に、核拡散防止のため、核の国際管理をする道義的な責任感があるということが出発点だった。

具体的には、他国に対して、軍事的、経済的に優位に立ったアメリカがリーダーシップをとり、軍事的ヘゲモニーを行使するのではなく、経済民主主義に基づく経済的安定を供給することが、債権国アメリカのなすべきことだとウォーレスは考えていた。その結果、核保有国になることだけが安全保障を得られるのではないというメッセージを送ることができ、国際機関に核管理を委託することも可能となる。つまり、「ウォーレス計画」は、当時の支配的な秩序(冷戦コンセンサス)とは異なった、ルイス・ハーツ(Louis Hartz)のいう非アメリカ的で無力な社会主義でもない、アメリカ的第三の道だったといえる。¹⁷現在の目を通して一考に値する新しい視点であろう。

¹ Edward L. and G. Frederisck Schapsmeier, *Prophet in Politics: Henry A. Wallace and the War Years, 1940-1965*, (Iowa: The Iowa State University Press, 1970).

² Norman D Markowitz, *The Rise and Fall of the People's Century: Henry A. Wallace and American Liberalism, 1941-1948*, (New York: Free Press, 1973).

³ Richard J. Walton, *Henry Wallace, Harry Truman, and the Cold War*, (New York: Viking Press, 1976).

⁴ J. Samuel Walker, *Henry A. Wallace and American Foreign Policy*, (Connecticut: Greenwood Press, 2000).

⁵ Mark L. Kleinman, *A World of Hope, A World of Fear: Henry A. Wallace, Reinhold Niebuhr, and American Liberalism*, (Columbus: Ohio State University, 2000).

⁶ Graham White and John Maze. *Henry A Wallace: His Search for a New World Order*, (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1995).

⁷ 安藤次男 『アメリカ自由主義とニュー・ディールー1940年代におけるリベラル派の分裂と再編一』(法律文化社、1990年)。

⁸ John C. Culver and John Hyde, *American Dreamer: A Life of Henry A. Wallace*, (New York: A Norton, 2000).

⁹ G. Pascal Zachary, *Endless Frontier: Vannevar Bush, Engineer of the American Century*, (Cambridge: The MIT Press, 1999).

¹⁰ John Morton Blum, ed., *The Price of Vision: The Diary of Henry A. Wallace 1942-1946*, (Boston: Houghton Mifflin Company, 1973); Henry Agard Wallace Diary. Microfilming Corporation of America, 1977. Reel 2.

¹¹ Henry Agard Wallace Oral History, 1944-1946. Reel 1, and 2. Microfilming Corporation of America, 1977. Columbia University Oral History Collection.

¹² Report by M.A.U.D. Committee on the Use of Uranium for a Director of Scientific Research, Ministry of Aircraft Production, "The Utilization of the Atomic Energy in Uranium," Annex III, 28, June 1941, pp.166-171. Records of the Cabinet Office (CAB) 90/8, The National Archives.

¹³ Henry A. Wallace (Secretary of Agriculture), *America Must Choose: The Advantages and Disadvantages of Nationalism, of World Trade, and of a Planned Middle Course*, (New York: Foreign Policy Association, 1934).

¹⁴ Henry A. Wallace, Russell Lord, ed., *The Century of the Common Man* (Vice-President of the United States), selected from recent public papers. (New York: Hutchinson & Co. (Publishers) LTD, 1943).

¹⁵ "Address on Foreign Policy at the Navy Day Celebration in New York City, October 27, 1945," *Public Papers of the Presidents of the United States: Harry S. Truman, 1945*, p.437.

¹⁶ Robert Dallek, *The American Style of Foreign Policy: Cultural Policy and Foreign Affairs*, (New York: Alfred A. Knopf, 1983), p.161.

¹⁷ ルイス・ハーツ 有賀 貞訳『アメリカ自由主義の伝統』(講談社、1994年)、335—368頁。

ポスト冷戦期におけるブッシュ・ドクトリンの戦略的意義に関する一解釈

—9・11 テロからイラク戦争開始までを中心に—

大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程2年

伊藤 孝治

本研究発表の目的は、ジョージ・W・ブッシュ大統領の9・11テロ後からイラク戦争に至るまでの外交政策をポスト冷戦期の文脈で分析し、アメリカ外交史におけるその転換点と変容過程を明らかにすることで、彼の外交政策がどのような戦略的意義を持っているのかを示すことである。

2001年の9・11テロ直後にブッシュ（特に断わらない限り、ブッシュとはジョージ・W・ブッシュのことである）大統領は、対テロ戦争を打ち出した。対テロ戦争におけるブッシュの外交政策はしばしばブッシュ・ドクトリンと呼ばれてきた。ブッシュ・ドクトリンは2002年9月にホワイトハウスが発表した『国家安全保障戦略』（以下では*NSS 2002*と略記）によって体系的に示されている。

管見の限り、*NSS 2002*に基づくブッシュ・ドクトリンの先行研究は、ブッシュ・ドクトリンを一枚岩的な外交政策と見なしているという問題点を内包している。アメリカは対テロ戦争の中で、アフガニスタン戦争とイラク戦争を戦ったが、それらの戦争のそれぞれの大義¹を考慮すれば、*NSS 2002*で主張されている概念は特に後者のイラク戦争に適合する概念である。ブッシュ・ドクトリンは9・11テロ後の対テロ戦争の中で形成された外交政策であることを考慮すれば、9・11テロからアフガニスタン戦争に至るまでの過程にも注目する必要がある。

またそれらの2つの過程を重視する理由は、ブッシュ・ドクトリンの変容過程からも明らかである。ブッシュは2001年9月15日の演説の中で、アメリカはテロリストだけではなくテロリストをかくまう国家も攻撃の対象とすることを明らかにしたが、これは*NSS 2002*で述べられている政策の一部にすぎない。アフガニスタン戦争とイラク戦争における大義が異なり、そのアプローチ方法も異なっていたことを考慮すれば、両者の質的相違は明白であるため、それらを戦う戦略にも本質的な差異があったと考えることができる。

そこで、ブッシュ・ドクトリンの2重性の概念を導入する。この見解に従えば、ブッシュ・ドクトリンは9・11テロ後からアフガニスタン戦争末期までの期間の外交政策と、アフガニスタン戦争末期からイラク戦争の開始までの期間の外交政策から構成されていると考えることができる。そのため、前者の期間を対テロ戦争の第1段階、後者の期間を対テロ戦争の第2段階と定義する。また本研究発表では、ブッシュ・ドクトリンをポスト冷戦期のアメリカ外交史に位置づける。その一義的目的は、ブッシュ・ドクトリンをより広範な観点から分析することである。

ポスト冷戦期への分水嶺であった1989年に、ジョージ・H・W・ブッシュ（以下ではG・H・ブッシュと略記）がアメリカの新大統領に就任した。G・H・ブッシュ政権の外交政策はソ連と東ヨーロッパに重点的に焦点を当てていた。その主要な目的は、西ヨーロッパにおけるアメリカの影響力を維持し続ける一方で、政治的・経済的自由化を通じて東ヨーロッパを開放し、ヨーロッパにおけるソ連の影響力を巻き返すことであった。

1989年11月9日に冷戦の象徴であったベルリンの壁が崩壊すると、東西ドイツの再統一問題は現実的かつ不可避な問題となって現れた。東西ドイツの再統一をめぐる最後まで問題となっていたのは、再統一後のドイツの地位をめぐるものであった。アメリカは、西ヨーロッパにおける自らの戦略的影響力を保持し続けるために、統一ドイツがNATOに加盟し続けることを一貫して要求した。その一方でソ連は地政学的観点からアメリカの主張を拒否し続けた。しかしアメリカによるヨーロッパの新安全保

障構想の提案と、西ドイツからの経済支援の約束を受けて、最終的にソ連はアメリカの条件で東西ドイツの再統一を承認した。冷戦が第2次世界大戦後のドイツの将来をめぐる米ソ間の妥協の失敗による産物であった²ことを考慮すれば、ドイツの再統一はまさに冷戦の終結を意味していた。

冷戦終結後に出現した新世界秩序の最初の挑戦は1990年8月のイラクによるクウェートへの侵攻であった。その対応がその後の将来的な世界秩序の行方に重要な影響を与えかねないことを認識していたG・H・ブッシュ政権は、基本的に国連を重視した多国間主義に基づき、イラクの軍事侵攻に対応した。またアメリカの最終的な目標は、サダム・フセインが支配しない、軍事的に弱体化したイラクを創造することであったが、その過程でアメリカは中東のバランス・オブ・パワーが崩れることを最も恐れていた。そのためG・H・ブッシュ政権はイラクの民主化よりもサダム政権の存続を選択した。このことは、アメリカの外交政策がポスト冷戦期においても中東という地域において一義的に地政学的利益の追求に特徴づけられていたことを意味している。

しかしポスト冷戦期のG・H・ブッシュ政権の外交政策は必ずしも地政学的要素に特徴づけられていたわけではない。そのことを明確に示しているのがソマリアへの軍事介入である。その主要な目的は国連の要請に基づく人道支援であったが、冷戦の終結により、ソマリアには軍事介入を正当化するだけのアメリカの戦略的利益はもはや存在しなかった。このことは、冷戦終結後のアメリカの外交政策が一義的に道義的理念によって動機づけられるようになったことの一例である。

それでも、ポスト冷戦期のG・H・ブッシュ政権の外交政策の追求していた目的が地政学的利益であろうが、道義的理念であろうが、その外交政策は一貫してアメリカのリーダーシップに基づく好意的な新世界秩序を形成しようとする戦略的概念に基づいていたのである。このことを考慮すれば、ポスト冷戦期のアメリカの外交政策が純粋に道義的理念のみに動機づけられるようになったとしても、その変化は質的というよりもむしろ量的なものである。

1993年1月に大統領に就任したビル・クリントンはG・H・ブッシュ政権とは異なる、道義的理念を重視する外交方針を打ち出そうとしていた。しかし道義的原理に重きを置くクリントンの外交政策は实际的ではなかった上に、彼の最優先課題は国内経済の発展であり、外交はあくまでも二次の問題に過ぎなかった。その結果、クリントン政権は戦略的観点からNATOを東ヨーロッパへと拡大し、人道支援の名目でボスニアに軍事介入したのであり、その外交政策は前任者のG・H・ブッシュ政権の外交政策を継承するものであった。

クリントン政権の外交政策はG・H・ブッシュ政権の外交政策と質的相違のないものであったが、クリントン政権の外交政策は重要な変化を生み出していた。それは冷戦後の新世界秩序に対するアプローチをめぐるものであった。クリントン政権は基本的に多国間主義的協調による世界秩序の維持を追求していたが、湾岸戦争後のイラク問題への対応はその限界を明らかにした。その結果がアメリカとイギリスによるイラクに対する単独行動主義的³な軍事行動であった。それでもクリントン政権が原則的に国連を通じた国際主義的アプローチでイラク問題に取り組んだことは注目すべきである。つまりクリントン政権は、多国間主義的枠組みを通じてポスト冷戦期の新世界秩序を維持しようとしたが、その過程で単独行動主義という選択肢を採用した。これがクリントン政権の外交政策の重要な戦略的意義である。

2001年1月にジョージ・W・ブッシュがクリントンを引き継いで新大統領に就任した。9・11テロ以前のブッシュ政権の外交政策は、基本的にクリントン政権の外交政策を引き継ぐものであった。ブッシュ政権の外交政策は国益の追求を一義的目的とする実際的な外交政策であり、国益は強い経済力や軍事力といった物質的な要素により定義された。ブッシュ政権は国益を追求することにおいて、国益にとって有用である場合には積極的な国際主義に基づくアプローチを採用したが、そうでない場合は一貫して

単独行動主義的な政策を推進した。それでもブッシュ政権の外交政策は専ら前者の多国間の協調に動機づけられていた。というのも、9・11 テロを経験するまで、ブッシュ政権の最優先課題は大幅減税に代表される国内の経済対策であったからである。

9・11 テロ直後にブッシュは対テロ戦争の開始を宣言するとともに、ブッシュ・ドクトリンを打ち出した。ブッシュ・ドクトリンの核は9・11 テロを実行したテロリストと彼らをかくまう国家は同一の責任があると断言したことであり、これはブッシュ・ドクトリンの原型となった。ブッシュ政権は対テロ戦争の最初の対象としてアルカイダと彼らをかくまうアフガニスタンのタリバン政権に焦点を当てる一方で、対テロ戦争を通じてアフガニスタン以外のテロ支援国家にも対処することを望んでいた。またブッシュはアフガニスタンのタリバン政権をデモンストレーションとして利用し、他のテロ支援国家の対外行動を変更させるために、対テロ戦争の対象をアフガニスタンに限定せず、より広範なものとした。その結果、ブッシュは対テロ戦争の基準を9・11 テロに関与したテロリストを支援する国家からあらゆるテロリストを支援する国家に一般化した。一般化されたブッシュ・ドクトリンをより効果的な戦略とするために、ブッシュは9月20日の議会演説ですべての国家にテロリストと決別するための最後の選択の機会を与えるとともに、今後もテロリストを支援し続ける国家を対テロ戦争の対象とすることを宣言した。その結果、ブッシュ・ドクトリンは「テロリストを支援し続ける国家はテロリストと同一であり、対テロ戦争の対象となる」ことを意味するようになった。

しかし対テロ戦争の開始とブッシュ・ドクトリンの形成はそれまでの外交政策を放棄することを意図していなかった。まずアフガニスタン戦争は対テロ戦争の文脈で戦われたが、対テロ戦争はクリントン政権時にすでに宣言されていた。またアフガニスタン戦争は一義的に9・11 テロに対する報復であったが、テロに対して軍事力で反応する習慣はクリントン政権時にすでに確立されていた。そのためクリントン政権の対テロ戦争とブッシュ政権の対テロ戦争の差は、どの程度軍事力を行使するかの量的なものであった。そのため9・11 テロはアメリカの外交政策を質的に変容させたわけではなかった。

またアメリカは対テロ戦争の第1段階であるアフガニスタン戦争を遂行する上で効率的な多国間主義を追求した。ブッシュ政権は対テロ戦争の中でアメリカの行動の自由を維持し、アフガニスタンへの軍事作戦を効率的におこなうために、単一の固定的な大連合ではなく、変則的で流動的な複数の連合を望んでいた。アフガニスタン戦争の過程でアメリカは主にアフガニスタンの隣国や中東の同盟国に対して軍事的支援を求め、NATOや国連のような国際的組織に対しては政治的役割を期待していた。

アフガニスタンを復興させる時点になると、アメリカはタリバン政権崩壊後のアフガニスタンの治安を維持するために NATO や国連といった多国間組織に軍事的協力を要請した。なぜならブッシュ政権はすでに対テロ戦争の第2段階に進むことを考えており、米軍をアフガニスタンの国家建設に使用するつもりはなかったからである。そのためアメリカは多国籍軍がアフガニスタンの軍事的真空を埋めることを望んでいたが、同時に多国籍の治安維持軍によってアフガニスタンでの米軍の行動が制限されることを懸念していた。結果的にブッシュ政権はアフガニスタン復興のための国際的治安部隊がアメリカ中央軍の指揮下に入る条件で、その部隊がアフガニスタンに展開することを支持した。このように9・11 テロ後のブッシュ政権は合理性を重視した効率的な多国間主義を積極的に追求し、アフガニスタンの戦後構想も効果的に多国間組織を利用したことにおいて、国際主義的な外交政策を推進したのである。

2001年11月21日にブッシュ政権がイラクに対する戦争計画を最優先課題とした時に、対テロ戦争は第2段階に入った。ブッシュが2002年1月の年頭教書演説で明らかにしたように、その段階において問題とされたのはテロリストに対する継続的な支援だけではなく、大量破壊兵器（以下ではWMDと略記）の追求である。またブッシュは2002年6月のウェストポイントでの演説を通じてWMDを獲得

しようとするテロ支援国家の脅威を予防的に排除する必要性を強調した。さらにブッシュ政権は対テロ戦争の第2段階において必要ならば単独でもイラクに対して軍事行動をおこなうことを宣言していた。イラク戦争はこれらの正式な戦略的概念に基づいておこなわれたのであり、それらは対テロ戦争の第2段階におけるブッシュ・ドクトリンの対象とアプローチを明確に示している。

対テロ戦争の第2段階におけるブッシュ・ドクトリンの一義的目的はWMDの開発とテロ支援を継続的におこなっていたイラクのサダム政権を打倒することであった。イラクに焦点が当てられた主要な要因は、外交的アプローチの失敗、国連による制裁体制の崩壊、WMDの獲得を物理的に可能にする豊富な天然資源、イラクの軍事的な脆弱性であった。またアメリカはイラクの体制変革をおこなうことで湾岸戦争以降続けてきたイラクへのコミットメントを終了させることができた。しかしこれはサダム・フセインを排除することで期待できた短期的な目的の1つであった。より重要であることは、アメリカのより長期的な世界戦略である。ブッシュ政権はWMDを開発するテロ支援国家とされたイラクの敵対的政権を打倒することで、それをデモンストレーションとして利用し、その他の反米的なテロ支援国家の行動を変化させようとした。対テロ戦争の第2段階におけるブッシュ・ドクトリンは湾岸戦争以降のイラク問題を片付けることを目的としていただけではなく、その他のテロ支援国家の敵対的行動を変化させようとする遠大で野心的な動機に基づいていたのである。

NSS 2002は必要ならば予防戦争⁴をおこない、アメリカ単独による一極支配の世界秩序を構築することを主張しているが、その文書は、ポスト冷戦期を特徴づけてきた多国間協調に基づく新世界秩序の終焉を意味している。それに代わる政治的秩序がポスト9・11世界秩序である。その構想はすでに冷戦終結後の段階で形成されており、1992年3月にリークされた国防総省の『国防計画指針』の中で包括的に示されていたが、その政治的枠組みはポスト冷戦期の新世界秩序の形成過程で受け入れられることはなかった。その実現を可能にしたのが9・11テロであり、9・11テロはアメリカの外交政策の転換点ではなく、転換点を生み出すための原動力であった。対テロ戦争の第2段階におけるブッシュ政権の外交政策は、まさにポスト9・11世界秩序の枠組みの中で形成された。

つまりアメリカの外交政策は、対テロ戦争の第2段階において、アプローチ、目的、政治思想の観点で、それまでの外交政策から質的に変容したと言える。アメリカ外交政策の質的な転換点はアフガニスタン戦争からイラク戦争へブッシュ政権の外交政策の重心が移行する時であり、それは2001年11月21日にブッシュがラムズフェルド国防長官に対してイラク戦争計画を優先的に立案するよう指示した時である。その時点からアメリカの外交政策は質的に変化し始め、アメリカは、予防戦争および単独行動主義を正式に採用し、自国の一極支配によるポスト9・11世界秩序の構築を開始するのである。

1 アフガニスタン戦争とイラク戦争の大義については、George W. Bush, "Radio Address of the President to the Nation," (October 6, 2001); George W. Bush, "President Says Saddam Hussein Must Leave Iraq within 48 Hours," (March 17, 2003) をそれぞれ参照。

2 Thomas J. McCormick, *America's Half-Century: United States Foreign Policy in the Cold War and After* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1995), 67.

3 ジョン・L・ギャディスは、アメリカ外交における「単独行動主義」を、「アメリカは自国の安全保障を他国の善意に委ねることはできないため、独自に行動する用意をしておかなければならないという信念」と定義している。John L. Gaddis, *Surprise, Security, and the American Experience* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2005), 22.

4 アーサー・M・シュレジンジャー・Jr.によれば、予防戦争とは「潜在的で将来的ゆえに不確かな脅威」に対処するためのアプローチである。Arthur M. Schlesinger, Jr., *War and the American Presidency* (New York: W. W. Norton, 2005), 23.

聴覚に障害のある大学生英語学習者の支援

—多文化共生の視点から—

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程1年

山岡 華菜子

1. はじめに

大学には様々な文化的背景を持った人々が存在している。例えば、人種や民族、社会経済上の階層や障害などである。そして、なかでも近年、人種や民族などの違いを認め、共生することが大切だという考えは、社会のグローバル化という流れにそって、活発に叫ばれているといえるであろう。しかし、障害者に関しては、ごく最近やっと注目が集まってきているといっても過言ではない。そこで、本研究では、大学の英語の授業を受講している、聴覚に障害のある学生の支援方法について、多文化共生の側面 (Allen, Schildroth and Woodward 1983) から考察を試みる。

2. 本研究の概要

本研究での聴覚にハンデのある大学生英語学習者の定義は、「音声言語を持たない、あるいは持ちにくい一つの社会的文化的集団 (木村・市田、2000)」である。さらに、健聴の大学生英語学習者を「音声言語を持つ集団」として定義づける。つまり耳が聞こえない、あるいは聞き取りにくいということを、聞こえる者よりも劣っていることとはみなさず、両者の中にある一つの違いとしてみなす。そして、その違いから生まれる独自の文化が各々の生活を彩っていると考え。たとえば、「手話」と「口で音声を伴い話す」ということは一つの言語的 (文化的) な違いである。また、Allen, Schildroth and Woodward(1983) も、「強度の難聴が引き起こすコミュニケーションの困難さは、聞こえる側と聞こえない側が双方の言語と文化を理解し合うという協力的な努力によってのみ克服できる。」と主張している。すなわち、両者の共存のためには、お互いの文化の違いを認め、それを理解しようとする姿勢が重要であると唱えているのだ。

そこで、本研究の課題は、いかにしてこの両者の学習を一つのクラスの中で成り立たせるのかという点である。その支援方法として、筆者の支援経験から、多角的な側面から具体的な方法を提示、紹介したい。

3. 先行研究

日野 (2002, 2004) はハワイの公立小学校でのハンデを有する子どもに対する差別について、筆者のフィールドワークによる事例研究が提示されている。そこでは、ハンデを有する児童が、温かな子どもたちであるにも関わらず、分離・隔離された学校生活を強いられている実体が観察されている。また、そのなかで、ハンデを持たない子どもたちにとって、ハンデを持つ子どもたちと一緒に学校生活を送ることは非常に有意義で、将来において平和な多文化共生社会を築くための重要な基礎のひとつとなるという主張がされている。

Johnson(2009)は、メキシコにおける聾者や難聴者のために立てられた学校について報告している。その学校はメキシコ手話を第一言語としてその地域に住む聾者や難聴者に教え、スペイン語を第二言語として教える学校である。学生数は4名で、そこでは5人のボランティア学生が一

学期半参加し、彼らは学校そのものや、聾や難聴の学生の学習を支援した。さらに全員が十分なメキシコ手話を学んだ。この報告の中では「多文化共生」という言葉は出てこないが、報告の中で描写されている内容は、ハンデのある者となない者が、一つの同じ場所で共生している姿である。

4. 調査の概要

4. 1. 日本の大学における障害者

平成20年度の独立行政法人日本学生支援機構の調査によると、日本国内の大学生の障害学生数はわずか5797人であった(平成19年度は4896人)。さらに、障害学生数が全体の学生数に占める割合は、0.20%であった。しかし、この数は2005年に調査を始めてから最多であった。その中で聴覚・言語障害学生の人数は、1345名(平成19年度は1192名)である。

4. 2. 聴覚障害者支援

各大学や各クラス、各障害学生によって支援方法というのは異なるであろうが、独立行政法人日本学生支援機構の平成20年度の調査によると最もよく利用されているのがノートテイクであり、全体の66.3%を占める。

4. 2. 1. ノートテイク

ノートテイクというのは、授業中話される音声情報をそのまま、あるいは要約して文字に変えて、授業内容をリアルタイムに聴覚障害学生に伝える、いわば筆記通訳(冷水 2009、Fukuda 2009、斉藤 2007)である。紙とペンを用い、通常2人1組で行い、クラス内の最前列に利用者を挟んだ形で行われることが多い。また、PCテイクといって、パソコンを用いたテイク方法もある。しかし、語学の授業などでは、外国語の文字(例えばアルファベット)と日本語を変換するのに時間がかかるなどの理由で、ノートテイクの方が好ましいといわれている。

ノートテイカーが書き取ることができる文字数は、平均して一分間に70語である。話す場合は一分間に平均350-400語産出するので、5分の1の量しか書き取れないことになる。また、PCテイクの場合も、平均で120-180語が可能だといわれている。いずれも、話された言葉をそのまま書き取ること、もしくはそのなかから重要だと思われる部分を要約することはとても困難な作業である(Fukuda, 2009)。そのため最近では、各大学などでノートテイカーの養成講座などが開かれている。

4. 2. 2. 具体的支援方法

次に、ノートテイカーがクラス内にいることを前提として、具体的な支援方法を提示する。以下の10項目が特に重要な支援であると考えられる。¹

1. 各授業の前に、その日の授業計画(アウトライン)の紙を配る。
2. クラス内で学生に発表させるときは、目で見えて分かるハンドアウトを作らせるように指示す

¹ これらの方法は斉藤(2007)をはじめとするその他の論文でも断片的に取り上げられているが、本研究では、それらを包括的に提示するとともに、新しい支援方法も加えている。

る。

3. テキストなどを読むときは不自然にならない程度にゆっくりと大きい声で読む。読ませる。
4. 聴覚障害学生にも発声を必要としない課題を与えて授業に積極的に参加させる。
5. リスニングの時には、教科書に本文の無い場合、聴覚障害学生にその内容のテープスクリプトを渡す。²
6. 教師は授業後に、障害学生、ノートテイカーに質問が無いか聞く。
7. 教師はノートテイカーの周辺がうるさい場合は静かにさせる。
8. 教師はテイカーの書いたノートを確認する。
9. テイカーは授業の初回に、教師が気づいていない場合は、聴覚障害学生の存在を担当教員に知らせる。
10. 教師、障害学生、ノートテイカーは頻繁にコミュニケーションをとる。

以上10項目をとりわけ重要な支援項目として挙げたが、支援利用学生の性格や授業に臨むスタイルによって、勿論これらが全て当てはまるわけではないということは、ここで断っておきたい。

例えば、「5. リスニングの時には、教科書に本文の無い場合、聴覚障害学生にその内容のテープスクリプトを渡す。」などはスクリプトが必要である場合とない場合に分けられよう。斉藤(2000)によれば、今まで受けた援助の中で、英語の勉強にかえて良くなかったと思うことは何か、という質問に対して、1人の学生が、「テープ内容のプリントをくれるだけでは、リスニングの授業の持つ意義が自分には学べない。人に合わせるためだけのものになっている」という答えがあった。こういった場合は、5番目の項目はこの学生には当てはまらない。

一方、自分の経験からは、5つ目のポイントは、次のエピソードにもとづき、非常に有効であると考えている。2006年の12月の第一週目と二週目に、私はある支援利用学生のテイクを行った。それは、その学生のテイカーとして常勤しているテイカーが学校を休んだ為に臨時で行ったものであった。担当したクラスはリスニングのクラスであった。教師は難聴の学生が自分のクラスにいと気づいていないのか、利用学生に何も援助をすることなく、リスニングのCDを流したり、隣席の学生と2人1組になってディスカッションをするよう指示したりしていた。利用学生も、授業に集中できていなく、授業内容に余り興味を示していないのがわかった。他の学生がCDを聞いているときにほとんど存在を無視された状況になっており、利用学生が授業に熱意がなくなるのも当然かもしれない。そこで、教師に、次回CDを流す時、その内容のテープスクリプトを持って来ていただくようにお伝えした。二週目にはCDを聞きながら、私はテープスクリプトの文字をペンで指しながら今どこの文が流れているのかを教えた。すると、利用学生は非常に真剣に本文を目で追っていた。私に伝わってくるその学生のやる気は一週目とは全く異なっていた。そして英検の措置(脚注2参照)からも、この方法はやはり有効であるといえる。

このように、例えばリスニングの授業でも何らかの支援が必ず必要であり、もしその支援に利

² 財団法人日本英語検定協会(英検)はさまざまなハンデを有する受験者に対して、「障害者に関する審査特別措置方法」という措置を視覚障害者、聴覚障害者、養護関係障害者という三つのカテゴリーに分けて設け、そのなかで、聴覚障害者特別措置では、「一次リスニングではディスプレイに表示されるテロップを速読で読み取る。」という措置をとっている。

用学生が納得できないのなら、話し合い、その学生に合った解決の方法を教師、ティーカー（2人）、利用学生の四人で探さなくてはならない。何らかの支援手段でほかの学生と同様に、授業に参加させることが肝要なのである。

5. おわりに

本発表では、大学の英語の授業における聴覚障害者支援を多文化共生の視点から実際の支援経験をもとに論じたが、これからも教師、支援学生はもちろんのこと、ハンデのない学生や大学の障害者支援のシステムそのものなど、さまざまな方向からそれぞれに可能な方法で、ハンデのある学習者を支援していくことが大事である。また、大学の中で多文化共生が成り立っていたら、いずれ社会一般の人々のハンデのある人々との共生に対する意識も変化するかもしれない。

参考文献

- 木村晴美・市田泰弘「ろう文化宣言 言語的少数者としてのろう者」現代思想編集部（編）『ろう文化』青土社、2000、pp.8 - 17。
- 斉藤くるみ「日本の大学における聴覚障害学生に対する英語教育の問題点とその改善策」『日本社会事業大学 社会事業研究所年報』第36号、社会事業研究所、2000、pp.15 - 33。
- 斉藤くるみ「聴覚障害を持つ学生のための英語等の授業における情報保障」『日本社会事業大学 社会事業研究所年報』第43号、社会事業研究所、2007、pp.1 - 23。
- 障害学生支援室『ノートテイクハンドブック』大阪大学障害学生支援室、2008。
- 独立行政法人日本学生支援機構『平成20年度（2008年度）大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書』独立行政法人日本学生支援機構、2009、http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/index.html
- 日野信行「ハワイの小学校における有ハンデ児の分離—多様性をうたう社会の閉鎖的一面—」言語文化共同研究プロジェクト2001『異文化理解教育の国際比較—多元的社会における共生に向けて—』大阪大学言語文化部・大学院言語文化研究科、2002、pp.25 - 35。
- 日野信行「ハンデを持つ児童に対するハワイの学校の差別」塩谷享（編）『ハワイ研究への招待 フィールドワークから見える新しいハワイ像』関西学院大学出版会、2004、pp.291 - 307。

References

- Allen, T., Schildroth, A., & Woodward. (1988). Linguistic and cultural role models for hearing-impaired children in elementary school programs. In M. Strong. (Ed.). *Language learning and deafness* (pp.184-191). Cambridge: Cambridge University Press.
- Grant, C. A., Ladson-Billings, G. (Eds.) (1997). *Dictionary of multicultural education*. Phoenix, Ariz:Oryx Press.
- Johnson, C.R., (2009). EFL and the deaf: Teachers making a difference. *Essential Teacher*, 6(2), 16-18.
- Fukuda, S.T. (2009). Support for deaf student in ESL/EFL conversation classes. *The Internet TESL Journal*, 15(2). <http://iteslj.org/Techniques/Fukuda-DeafStudents.html>

シェイクスピア初期喜劇における悪役の存在意義

大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻博士後期課程 1 年

飯盛 康史

『ヴェローナの二紳士』（以下、『ヴェローナ』）は、シェイクスピアが執筆した喜劇の中でも初期の作品である。ヴェローナに住む二人の親友、プロテウスとヴァレンタインはミラノへと奉公の旅に出る。先にミラノに至ったヴァレンタインはミラノ公爵の娘シルヴィアに恋をする。故郷ヴェローナに恋人ジュリアを残してヴァレンタインの後を追ったプロテウスは、シルヴィアをヴァレンタインに紹介されるとシルヴィアに対して恋心を抱くようになり、ヴァレンタイン、さらには故郷にいる恋人ジュリアをも欺きシルヴィアを手に入れようとする。プロテウスの策略によってヴァレンタインは追放の憂き目に遭うも、最後に二人は再開、全てが明らかとなりプロテウスは自らの行いを恥じて、一同が和解する。この作品の主人公の一人であるプロテウスは、ミラノ公爵に対しては非常に忠実な臣下を演じつつ、独白を多用して観客には心のうちをさらすという、二面性を持ったキャラクターであり、中世道徳劇における「悪役（ヴァイス）」の影響を強く受けた人物である。

シェイクスピア喜劇における悪役という意味では、例えば中期の作品『お気に召すまま』のオリヴァーという人物は、人当たりのいい弟オーランドを憎み、計略にはめて彼を殺してしまおうとする悪役である。しかし、彼はプロテウスと違って主人公ではない。また、同じく中期の喜劇である『ヴェニスの商人』には、圧倒的な存在感を見せる金貸しシャイロックが登場するが、彼は今回扱おうとするプロテウスのような、裏切り、二面性を特徴とはしていないし。また、いずれの人物も劇の主人公ではない。プロテウスは喜劇の主人公でありながら悪役であるという、シェイクスピアの数あるキャラクターの中でも特異な存在である。

プロテウスに関しては、Anne Righter (i.e. Anne Barton)が、彼のキャラクター造形に関してシェイクスピア最高峰の悪役の一人であるグロスター公、後のリチャード三世と共通するものを見出している。が、同時にプロテウスの悪役性はリチャードのそれと比べると規模が小さく、つまらないものであるとも述べている (91)。深いまでの悪役宣言によって偽善と非道の限りを尽くすリチャードは、その巧みな計略と二枚舌で観客の共感さえ誘う一方、プロテウスの悪役性は確かにリチャードと共通するものがあるものの、観客の共感をも誘うわけではない。また、Roland Mushat Frye は、

プロテウスは確かに他の喜劇にはあまり見られない悪役ではあるが、その悪役性はヴァレンティンとの対立項として作られたに過ぎないという、低い評価を与えた上で、喜劇における悪役として先述のシャイロックに高い評価を与える(91)。では主役にして悪役であるプロテウスは、劇においてどのような役割を果たすのか。

悪役(ヴァイス)は、Janette Dillon が指摘するように劇中のキャラクターに対してではなく観客に直接呼びかける独白、傍白を多用して劇中の虚構の世界からしばしば離脱し、そして再び劇中の世界に戻るとそこでは善良な人物を演じる。このように、異なる二つの世界を行き来して、それぞれの次元で異なった性質の人物を演じる二面性が、悪役の特徴である。さて、プロテウスという名は、オーヴィッドの『変身』に登場する海神に由来するものであるが、この海神は姿をこころと変えることで尋問を逃れようとするキャラクターであり、グロスター公リチャードも悪人になるにあたって目標とした存在の1つである (*Henry VI Part III* 3.2.188-93)。が、プロテウスは最初から悪役だったわけではない。それを最も現わしているのが第二幕第二場である。ここでプロテウスはミラノに旅立つにあたり恋人ジュリアと誓いの指輪を交換している。ところが第二幕第四場の終盤、シルヴィアを目にすると、彼は突如自らの心変わりとしてヴァレンティン、ジュリアに対する裏切りと、シルヴィアを奪い取るということを独白して悪役になる。「プロテウス」の名が示すとおりに、彼は途中で悪役に変貌し、様々な表情を使い分ける。ミラノ大公に対して忠義のある人物であることを演じることで、ヴァレンティンの追放を狙い、それでいて狙い通りに追放されることになったヴァレンティンに対し、彼はあたかも不意の追放に驚き嘆く親友であるかのごとく振舞う。さらにヴェローナに残してきた恋人ジュリアに対する扱いはさらにひどいもので、シルヴィアに言い寄るに当たって「ジュリアは死んだ」ということにして(2.6.27-28)、当人のいないところで勝手に裏切ってしまう。ジュリアはプロテウスの様子を見るため男装してヴェローナからミラノに向かうが、彼女が目にするのは自分を捨て、シルヴィアに言い寄ろうとする不実なプロテウスの姿である。プロテウスは男装したジュリアを本人と知らずにシルヴィアへの使いを頼み、あろうことかヴェローナで交換した指輪をシルヴィアへの贈り物として託す。ここまでのキャラクター分析から、プロテウスが悪役であることには異論を差し挟む余地は無い。だがその一方で、例えばグロスター公リチャードの策略として行われる求愛がその悪さゆえに観客の共感を誘うのに対して、プロテウスの場合は、浮気による友人・恋人に対する裏切

り、さらに哀れなジュリアをシルヴィアへの使いにすることで苦しめることから、リチャードのように共感を呼ぶというよりはむしろ、観客に憎まれる存在になる。

Michael Friedman は著書 *"The World Must Be Peopled": Shakespeare's Comedies of Forgiveness* において、『ヴェローナ』を含めた四つのシェイクスピア劇を「許しの喜劇 (Comedy of forgiveness)」として、プロテウスが悪役であると同時に、悪事を改悛して許される喜劇の主人公 (Forgiven comic hero) であると位置づけた (23)。Friedman は同著の中で、1987 年ニューヨークで行われた『ヴェローナ』上演に際して、監督 Stuart Vaughan がプロテウスを「それまでの悪事に関わらず、好ましいキャラクターにするべき」として演出したことを紹介している。Friedman によれば、この劇が、ヴァレンティンによってプロテウスが今までの罪を許されるという形を取る以上、プロテウスは (例えばシャイロックのように) 徹底的な悪役であってはならないというのである。プロテウスによって追放されたヴァレンティンは第四幕第一場でマンチュアに向かう途中、山賊の一団に捕らえられるが、その立派な態度に感銘を受けた山賊によって、逆に山賊の頭領になる。そして第五幕第二場で何も知らないプロテウスがミラノ大公や、男装してプロテウスに気づかれぬよう付き添っているジュリアとともに逃亡したシルヴィアを捕まえにマンチュアへと向かう。これまでの描写により、観客はプロテウスに対して、少なくとも好感は持たない。むしろ彼はその簡単な心変わりゆえに憎まれることで観客を惹きつける。しかし、彼の奸計がいずれ破れることは、彼が捨てた恋人ジュリアが付き添っていることで観客に対しては既に明らかである。また、プロテウスがマンチュアへ向かう場面で観客は裏切られたヴァレンティンと裏切ったプロテウスの再会、すなわちプロテウスの奸計の完全な破綻を期待する。そして、実際にヴァレンティンと対面したプロテウスはその姿を目にするや否や、自らの犯した罪を悔い、ヴァレンティンに許しを請い、許される。これは、例えば『テンペスト』のアロンゾーのような、後期のロマンス劇の敵役らにも通じるものがある。劇の前半、突然の心変わりによって観客の注意を一手に引き受けるプロテウスであるが、終盤にさしかかるに連れて、次第に彼の計略は破綻へと近づいていく。その結果観客の焦点はプロテウスに対する憎しみではなく、ヴァレンティン、シルヴィアがこの悪人をどう扱うのかというところへと移る。すなわち、プロテウスは主役というよりはむしろ引き立て役に回っていく。その不誠実な態度は、結果としてヴァレンティンの誠実さ、ジュリアの貞淑さを際立たせるための触媒になる。

このように、プロテウスは劇の前半においては、独白の多用など悪役的な行動を取ることで主役として注目を集めつつ、その不実によって最後にはもう一人の主人公であるヴァレンティンを光らせる脇役にもなるのである。明確なサブプロットを持っていないこの劇が『ヴェローナの紳士たち』ではなくあくまで『ヴェローナの二紳士』であるためには、プロテウスは自らが主役になり、尚且つヴァレンティンを引き立てる二つの役を引き受ける必要があった。そして、プロテウスを引き立て役に回すに当たって有効な手段は、彼を同時期に執筆された『リチャード三世』の主人公のような悪役主人公として観客に興味を持たせ、しかもその悪役性が劇全体を覆いつくすことなく憎らしく見られる程度のものにすることで、最後に解決を図ることが出来るようなものにすることなのであった。プロテウスは、その役回りにおいても、まさにその名に相応しく、様々に立場を変えながら、この喜劇を引っ張っていくのである。

References

- Dillon, Janette. *The Cambridge Introduction to Early English Theatre*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- Friedman, Michael D. *"The World Must Be Peopled": Shakespeare's Comedies of Forgiveness*. Madison: Fairleigh Dickson UP, 2002.
- Frye, Roland Mushat. *Shakespeare: The Art of the Dramatist*. London: Allen & Unwin, 1982.
- Pollard, Alfred W. ed. *English Miracle Plays Moralities and Interludes: Specimens of the Pre-Elizabethan Drama*. Oxford: Clarendon P, 1965.
- Righter, Anne. *Shakespeare and the Idea of the Play*. Harmondsworth: Penguin Books, 1967.
- Shakespeare, William. *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden. Oxford: Clarendon P, 1993.
- . *The Third Part of King Henry VI*. Ed. Michael Hattaway. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- . *The Merchant of Venice*. Ed. M. M. Mahood. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- . *The Two Gentlemen of Verona*. Ed. William. C. Carroll. London: Arden, 2004.
- . *The Tempest*. Ed. Stephen Orgel. Oxford: Oxford UP, 1998.

いわゆる打消の助動詞「ず」について

園田学園女子大学

吉永 尚

1. 名詞性の観察

1.1 非慣用表現における名詞性の観察

表1：名詞的要素の付加

① 珍しくこの連休はどこへも行かずだ。(名詞句に後置される Predicate Copula (述語コピュラ) の「だ」)
② 誰にも頼らず誰にも相談せずで今までやって来たが、考え方が変わった。(名詞句に後置される後置詞の「で」)
③ 私の話を笑わずに最後まで聞いてくれた。(名詞句に後置される後置詞の「に」)
④ 吹雪で外へも出られず、連絡もできずの状態が続いた。(名詞句修飾の「の」)
⑤ 普段から焦らず怒らずを心がけている。(名詞句に後置される格助詞の「を」「が」) 焦らず怒らずがモットーです。
⑥ あの病気知らずが何とかで寝込んだらしい。(名詞句に前置される指示詞「あの」「この」) この病気知らずが三日も寝込んだのだから今年の風邪は怖い。

「ず」句には名詞句を構成する形式名詞的な機能があると考えられる。¹

図1 「に」を後置詞Pとした場合の「ゴミを出しに行く」

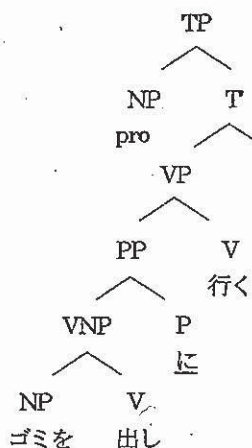


図2 「に」を補文標識Cとした場合

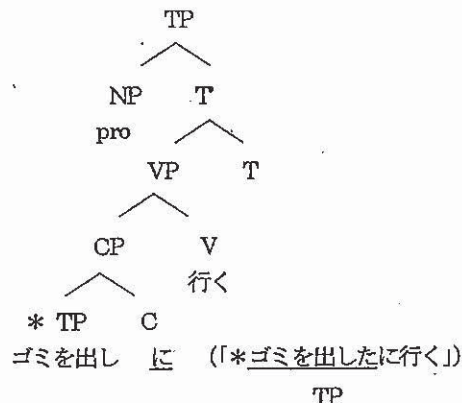


図3 「に」を後置詞Pとした場合の「油を使わずに焼く」

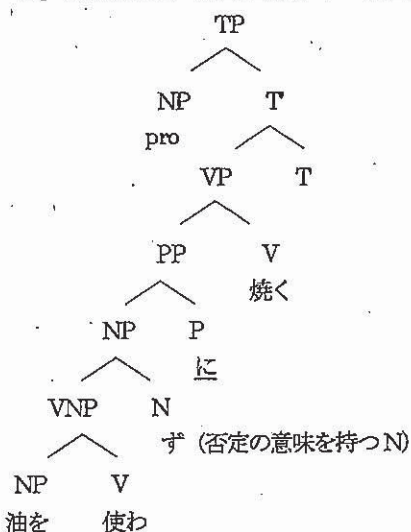
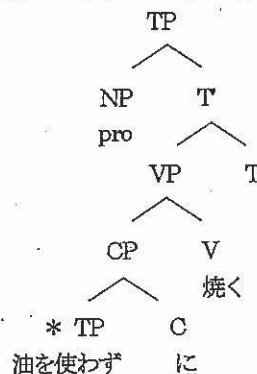


図4 「に」を補文標識Cとした場合



「ゴミを出し」「油を使わず」にTがない事は構造的に判断される。動詞連用形はさまざまな環境に出現するが、

¹ 現代語で「ず」の終止形、未然形の使用はあり得ず、後述のa以外は全て連用形であると判断される。

一般的にTが無い位置にある。結論として「ゴミを出しに」の「に」はPであり「油を使わずに」もCPではなくPPであると考えたい。

1.2 慣用表現における名詞性の観察

1.1 で挙げた①～⑥のどれが許容されるかによって四つに分類する。(慣用表現を太字で表記する)

a) <①④を許容するもの>

1)是非行ってみなさい、百聞は一見に如かずだよ。 2)今回の事件は典型的な悪銭身につかずのパターンだ。ワンフリーズ性が強く語順を入れ替えたり語を置き換えたりすることはできない。類例—手間いらず、あぶはちとらず、井の中の蛙大海を知らず、魚の目に水見え、李下に冠を正さず、君子危うきに近寄らず、後悔先に立たず、弘法は筆を選ばず、立つ鳥跡を濁さず、働かざる者食うべからず、覆水盆に返らず、論語読みの論語知らず、親の心子知らず、虎穴に入らずんば虎児を得ず、情けは人の為ならず

①④を許容しこれらとは少し異なると思われるグループに次の様な対比表現がある。

3)そういう恐れはなきにしもあらずだ。 4)今は暑からず寒からずのベストシーズンだ。類例—大きすぎず小さすぎず、高からず低からず、太からず細からず

b) <①②④⑤を許容するもの>

5)部下を使う極意は生かさず殺さずだそうだ。 6)あの二人は全く見ず知らずだったそうだ。7)今日は取り込んでいて飲まず食わずで働いている。8)その詩人は左遷されて鳴かず飛ばずの人生を送った。9)親子の関係は付かず離れずを心がけるとよい。 10)戦後しばらくは食うや食わずが続いたという。対比・類似的で名詞性が強く後述のd)以外では唯一格助詞を許容し、語彙化がかなり進んでいると思われる。

c) <③のみ許容するもの>

11)彼はずっとわき目も振らずに働いてきたからこそ成功したのです。動詞や文を修飾する副詞的な「ず」句であり、「に」が省略されることも多い。類例—間髪を入れず、昼夜をおかず、昼夜を分かたず、手もぬらさず、手を汚さず、時を移さず、取る物も取りあえず、肌身はなさず、慌てず騒がず、一つ残らず、一条乱れず、一条まとわず

d) <①④⑤⑥を許容するもの>

12)あんなところに一人で行くなんて本当に怖いもの知らずだ。 13)彼はまだ、世間知らずの子供に過ぎない。14)最近では礼儀知らずが多くて困る。15)あのわけ分からずがトラブルを起こしたらいい。16)この恥知らず! 「ず」句が人を総称し強い名詞性を持つ。類例—恩知らず、情け知らず、恐れ知らず、疲れ知らず、役立たず、物言わず

a)は格言・ことわざがワンフリーズ化したもの、b)は最も語彙化が進み名詞句機能が強いもの、c)は副詞化したもの、d)は「ず」句で表される特徴を持つ人の総称であり、「ず」句の名詞性を傍証していると思われる。

1.3 その他の「ず」句の慣用的用法

「寝ずの番、開かずの扉(間・踏切)、食わず嫌い、負けず嫌い、わからずじまい、言わずじまい、わからず屋、減らず口」→完全に固定化・イディオム化。「相変わらず、しらずしらず、絶えず、遠からず、とりあえず、いざ知らず、ご多分にもれず」→完全に副詞化。(c)は後置詞「に」が付加、名詞性あり)「猫いらず、医者いらず、親知らず、土踏まず」→完全に名詞化。これらの用法には打消の助動詞の範疇を越えるものも多く「ず」句の本来的な名詞性と関係があると判断される。

2. 「ず」の中止法について

「ず」の中止法には、連用形中止法・テ形接続法との類似が見られ「ず」に」と「ず」の相違は並列文に現れる。

表2: 連用形中止法・テ形接続法との対比

<付帯> 眼を閉じ(閉じて)音楽を聴く。	手を使わず(ず)に冷蔵庫のドアを閉める。
<継起> 顔を洗い(洗って)お茶を飲む。	ドアを閉めず(ず)に出て行った。
<因果> 携帯を置き忘れ(置き忘れて)困った。	携帯を見つけられず(見つけれられず)に困った。
<並列> 太郎は英語がで(でき)て花子はできない。太郎は英語がで(でき)ず(*ず)に花子はよくできる。	

連用形中止法・テ形接続法の否定文には「ず」「ず」に」を対応させる事ができると思われるが、並列用法だけ

は「ず」を用いる事ができない。並列用法は等位構造を取ると考えられ、並列用法以外の「ず」「ずに」は主節の補足説明成分と考えられる。²動詞連用形中止法は並列文によく現れるが、動詞連用形は「ゴミ出し」や「釣り」の様に名詞的性質を持ち、等位構造を導く性質も併せ持っている。⁴同様に「ず」の連用形も名詞性は強くなっているが助動詞連用形として中止法を導く機能を温存していると推測される。動詞連用形には名詞的用法はあるが、「ず」の様な名詞句構成機能はない事を表3で確認する。①～⑥は表1の例文に基づく。

表3:「ず」と動詞連用形の名詞性の比較 (⑥は動詞連用形由来の複合名詞)

	「ず」句	動詞連用形句
①	珍しくこの連休はどこへも行かずだ。	*珍しくこの連休はどこへでも行きだ。
②	誰にも頼らず誰にも相談せずで今までやって来たが、考え方が変わった。	*誰にでも頼り誰にでも相談しでやって来たが、考え方が変わった。
③	私の話を笑わずに最後まで聞いてくれた。	*私の話を笑いに最後まで聞いてくれた。
④	吹雪で外へも出られず、連絡もできずの状態が続いた。	*外へも出られ、連絡もできの状態だった。
⑤	普段から焦らず怒らずを心がけている。 焦らず怒らずがモットーです。	?よく食べよく笑いを心がけている。 *よく食べよく笑いがモットーです。
⑥	あの病気知らずが何とかで寝込んだらしい。 この病気知らずが寝込んだのだから今年の風邪は凄い。	OK あの物知りでも知らないみたいだ。 OK この酒呑みでも飲まない。

並列文は確かに独立性、非従属性を特徴としているがT要素は必ずしも必要ではなく「男子は左、女子は右。」の様な名詞並列文も許容され、中止法は「ず」の形式名詞的な性質と矛盾しない。「ず」句の機能は、

i) NP (人)「恩知らず」 ii) NP (助詞類付加)「付かず離れず」

iii) XP (中止法) ～ず～ (中止法の「ず」句の範疇特定は今後の課題としたい) に大別される。

3.助動詞「ない」との相違

「ない」はVP上位否定句の主要部であり否定句はTの補部となる。従って「ず」句のような名詞性は見られず「この役立たずが」「油を使わずに焼く」を「ない」に置き換えた「*この役立たないが」「*油を使わないに焼く」は許容されない。「ない」には「ず」のような名詞性がない事を表4で確認する。(①～⑥は表1参照)

表4:「ず」と「ない」の名詞性の比較 (②はテ形接続の「ない形」の読みで許容される)

	「ず」句	「ない」句
①	珍しくこの連休はどこへも行かずだ。	*珍しくこの連休はどこへも行かないだ。
②	誰にも頼らず誰にも相談せずで今までやって来たが、考え方が変わった。	誰にも頼らないで誰にも相談しないで(*なくて)今までやって来たが、考え方が変わった。
③	私の話を笑わずに最後まで聞いてくれた。	*私の話を笑わないに最後まで聞いてくれた。
④	吹雪で外へも出られず、連絡もできずの状態が続いた。	*外へも出らない連絡もできないの状態だった。
⑤	普段から焦らず怒らずを心がけている。 焦らず怒らずがモットーです。	?普段から焦らない怒らないを心がけている。 ?焦らない怒らないがモットーです。
⑥	あの病気知らずが何とかで寝込んだらしい。 この病気知らずが寝込んだのだから今年の風邪は怖い。	*あの病気知らないがかぜで寝込んだらしい。 *この病気知らないがかぜで寝込んだ。

² テ形接続の各用法の従属度は吉永(2008)第五章を参照されたい。三原(2009)では継起用法と因果用法を統一し等位的な並列用法以外をVP付加またはTP付加としている。また「ないで」もテ形接続否定形であり各用法に分布する。また、付帯用法は表1の③に相当すると考える。

³ 「ず」と「ずに」については「だけ・否定」のスコープ観察などで相違が見られ不可解な点が多いが、これについては今後の課題としたい。

⁴ 田川(2008)は分散形理論の立場で、「動詞連用形自体が名詞化機能を持つわけではなく、いわゆる助動詞やある接続形式に接続する時それらを取る補文内にTPレベルの投射が現れない」としている。

4. 俳句における「ず」の分析

やがて死ぬけしきは見えずせみの声 (松尾芭蕉)
 むつかしき拍子も見えず里神楽 (河合曾良)
 バスの待ち大路の春をうたがはず (石田波郷)
 流水や宗谷の門波荒れやまず (山口誓子)
 妻二夕夜あらず二夕夜の天の川 (中村草田男)
 音のして海は見えずよ草の花 (木下夕爾)
 短夜の鶴ともならず葉包紙 (北野平八)
 学問の黄昏さむくものをいはず (加藤楸邨)
 余花の雨ひとりひと日を何もせず (岡本眸)
 夫逝きぬちちはは遠く知り給はず (桂信子)
 山を視る山に陽あたり夫あらず (桂信子)

俳句での「ず」の扱いは18種の切字の一つとされ、俳句の「切れ」「停顿」を表す要素の一つである。俳句が興隆した室町末期以降「ず」の終止形は形骸化しており、ほぼ連用形であると思われる。連用中止法で一旦切れて下句と繋がる、あるいは句末で余韻を残す用法であろう。動詞連用形にも同様の用法があり句末には「あり」「降り」「持ち」などの連用形が多く見られる。俳句における「ず」句は名詞性によって、名詞止めの様な余韻・強調を表すか、連用中止法で「切れ」の技法に用いられている。口語的な「ない」は否定句の主要部となり明確な否定構文を構築するので、俳句の様な短詩形では言い切りの形では句末に殆ど現れず、「なし」か「なく」が選択される。「ず」と比較して名詞性が乏しい事が原因であろう。

5. おわりに

「ず」は慣用表現に多く用いられ口語的な「ない」の文語的類義語とされる事が多いが、「ない」とはかなり異なった性質がある。中止法の「ず」句の語彙特定は不明であり、統語位置も含めて更に検討したい。

参考文献

- 青柳宏(2006)『日本語の助詞と機能総論』ひつじ書房
 内堀朝子(2007)「モダリティ要素による認可の(非)不透明領域—「こと」「よう(に(と))」が導く命令・祈願表現をめぐって」長谷川信子編『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』ひつじ書房
 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
 田川拓海(2008)「統語構造と活用形の非一対対応：連用形、不定形、終止形」日本語文法学会第9回大会発表予稿集
 西尾寅弥(1972)「打消の助動詞」鈴木一彦、林巨樹編集『品詞別日本文法講座7』明治書院
 林巨樹(1969)「打消の助動詞ず—打消」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
 三原健一・平岩健(2006)『新日本語の統語構造』松柏社
 三原健一(2009)「テ形節の統語構造」大阪大学大学院授業資料
 森田良行(1984)『基礎日本語3』角川書店
 吉永尚(2008)『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院
 吉永尚(2009a)「テ形接続における統語的分析—俳句を例として」『園田学園女子大学論文集』第43号
 吉永尚(2009b)「いわゆる打消の助動詞「ず」についての統語的分析」日本言語学会第139回大会発表予稿集
 Watanabe, Akira (1996) 'Nominative-genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective'. *Journal of East Asian Linguistics* 5:4
 Yanagida, Yuko (2006) 'Word Order and Clause Structure in Early Old Japanese'. *Journal of East Asian Linguistics* 15:1

引用文献

- 乾裕幸(2002)『古典俳句鑑賞』富士見書房
 大野林火(1993)『入門歳時記』角川書店
 桂信子(1990)『桂信子集草色』三一書房
 北野平八(1987)『北野平八句集』富士見書房
 佐川和夫(2002)『名俳句—000』彩図社
 長谷川權(2008)『国民的俳句百選』講談社
 山田孝雄(1956)『俳諧文法概論』宝文館

中国領内のモンゴル系孤立的諸言語に見える形状語の特徴について

大阪大学大学院言語社会研究科博士後期課程3年

ヤマーフー・バダムハンド

0. はじめに

モンゴル語で「形状語」とは、一般に (1) CVC・C_{Ve} (Cは子音、Vは母音、Veは二重母音、一部長母音を含む) の形式をもち、(2) 人や物の形や状態を表す意味をもつ一群の「形状動詞」及び、それらからほぼ規則的に CVC・C(V)_{rVp} の形式で派生される「形状名詞」の両者の概念を含むものである。

さて、本稿では、モンゴル語中央方言 (ハルハ、内モンゴル、オイラト、ブリヤート方言等) を除く、とりわけ中国領内のモンゴル系孤立的諸言語の、いわゆる保安語、東郷語、土族語、東部裕固語、達斡爾語の5つの言語において、

1. モンゴル文語 (Mo.) やモンゴル語に相当する形状動詞がどのような形式でどの程度存在しているのか、当該言語特有の固有形状動詞が存在するか否か、また、モンゴル文語の形状動詞派生接尾辞 -*ija-*、-*yana-* に相当する形式が存在するか否か等、当該言語における形状動詞の現状を把握する、
2. モンゴル文語の形状名詞派生接尾辞 -*yar*、-*yai*、-*r*、及び -*n*、-*ng*、-*γ* / -*g* 等に相当する形式を有する形状名詞が、当該言語でどのような形式でどの程度存在しているのか、「形状動詞・名詞同一語幹」が存在するか否か等、当該言語における形状名詞の現状を把握する、

の2点に主に焦点を当て、一般に当該言語の形状語の特徴を明らかにすることを目的とするものである。

1. 形状語の判定基準

<判定基準1>

モンゴル語の動詞語幹が、CVC・C_{Ve} (Cは子音、Vは母音、Veは二重母音、一部長母音を含む) であること、つまり、動詞語幹は、必ず二重母音(一部長母音を含む)でなければならない。ちなみに、この形式は、モンゴル文語 (Mo.) では、CVC・C_{Vyi} と定式化されるものに相当する。

<判定基準2>

もし、当該の動詞語幹が「形状語」であるためには、必ず形状名詞派生接尾辞 -*rap* (一部 -*rai*、-*p* を含む) か、あるいは、形状動詞派生接尾辞 -*iza-* (反復アスペクト表示) の少なくともいずれか1つを接続できなければならない。

換言すれば、上記の2つの条件のいずれか一方だけしか満たしていないか、あるいは、そのいずれも満たさない場合は、形状語とは言えないという立場をとることとする。

	判定基準1	判定基準2		形状語の判定
	CVC・C _{Ve}	形状名詞派生接尾辞 - <i>rap</i> (- <i>rai</i> 、- <i>p</i>)	形状動詞派生接尾辞 - <i>iza-</i>	
A	+	+	+	+
B	+	+	-	+
B'	+	-	+	+
C	+	-	-	-
D	-	+	+	-
E	-	+	-	-
E'	-	-	+	-

F	—	—	—	—
---	---	---	---	---

つまり、上表のAもしくはB、B'の3つのグループに属する語のみを、「形状語」と呼び、C以下、Fまでの語は「形状語」とは呼ばない立場を一貫してとりたい。しかも、「形状語」(дүрслэх үг)のうち、プラス(+)が3つのAグループを「完全形状語」(бүрэн дүрслэх үг)、プラス(+)が2つのBまたはB'のグループを「不完全形状語」(бүрэн бус дүрслэх үг)と呼んで、両者を下位分類して区別したい。また、DまたはE、E'のグループは、「擬似形状語」(дууриамал дүрслэх үг)とでも言うべきものであるが、形状語ではないことに注意されたい。

<モンゴル語の「形状語」(дүрслэх үг)の下位分類>

- a. Aグループ …………… 「完全形状語」(бүрэн дүрслэх үг)
- b. B、B'グループ … 「不完全形状語」(бүрэн бус дүрслэх үг)
- c. C-Fグループ … 「非形状語」(дүрслэх үгэнд орохгүй үг)

2. 保安語の形状語

形状動詞	ø (語幹)		-lja-	-yana-
	+		—	—
形状名詞	-yar	-yai	-r	-n、-ng、-γ/-g
	—	—	—	-g (化石的)

3. 東郷語の形状語

形状動詞	ø (語幹)		-lja-	-yana-
	+		—	—
形状名詞	-yar	-yai	-r	-n、-ng、-γ/-g
	—	—	—	-n (化石的)

4. 土族語の形状語

形状動詞	ø (語幹)		-lja-	-yana-
	+		+(非生産的)	—
形状名詞	-yar	-yai	-r	-n、-ng、-γ/-g
	—	—	—	-n (化石的)

5. 東部裕固語の形状語

形状動詞	ø (語幹)		-lja-	-yana-
	+		+(非生産的)	—
形状名詞	-yar	-yai	-r	-n、-ng、-γ/-g
	+	+(化石的)	+	—

6. 達斡爾語の形状語

形状動詞	ø (語幹)		-lja-	-yana-
	+		+	—
形状名詞	-yar	-yai	-r	-n、-ng、-γ/-g
	+	+	+(化石的)	-n (化石的)

7. まとめ

以上の結果を要約すると、中国領内のモンゴル系孤立的諸言語における形状動詞及び形状名詞の特徴は次の通りである。

A) 形状動詞

	ø (語幹)	固有形状語の有無	-lja-	-yana-
保安語	+	—	—	—
東郷語	+	—	—	—
土族語	+	+	+(非生産的)	—
東部裕固語	+	+	+(非生産的)	—
達斡爾語	+	+	+	—

B) 形状名詞

	-yar	-yai	-r	-n、-ng、-γ/-g	形状動詞・名詞同一語幹の有無
保安語	—	—	—	-g (化石的)	—
東郷語	—	—	—	-n (化石的)	—
土族語	—	—	—	-n (化石的)	+
東部裕固語	+	+(化石的)	+	—	—
達斡爾語	+	+	+(化石的)	-n (化石的)	+

8. おわりに

以上、中国領内のモンゴル系孤立的諸言語の、いわゆる保安語、東郷語、土族語、東部裕固語、達斡爾語の5つの言語を、形状語(形状動詞及び形状名詞)の観点から、とりわけ形状動詞に関しては、1. 形状動詞の有無、2. 固有形状語の有無、3. 形状動詞派生接尾辞 -lja- の接続の可否、4. 形状動詞派生接尾辞 -yana- の接続の可否の4点から、また、形状名詞に関しては、1. 形状名詞派生接尾辞 -yar の接続の可否、2. 形状名詞派生接尾辞 -yai の接続の可否、3. 形状名詞派生接尾辞 -r の接続の可否、4. 形状名詞派生接尾辞 -n、-ng、-γ/-g 等の接続の可否、5. 形状動詞・名詞同一語幹の有無の5点から、それぞれ詳細に分析を加え、当該言語の形状語の特徴をできる限り明らかにすることを試みた。

分析の結果、他の言語学的特徴はさておき、問題を形状語の一点に絞って結論を述べると次の通りである。

1. 保安語と東郷語は、形状動詞、形状名詞ともにほぼ同じ分布を示し、形状語に関しては、両者は全く同じ特徴を有している。
 2. 土族語は、形状動詞に関しては、東部裕固語、達斡爾語とほぼ同じ分布を示すのに対し、形状名詞に関しては、保安語、東郷語とほぼ同じ分布を示し、形状語全体として見れば、保安語・東郷語の言語群と東部裕固語・達斡爾語の言語群のほぼ中間的特徴を有している。
 3. 東部裕固語は、形状動詞に関しては、先の2で述べたように、土族語、達斡爾語とほぼ同じ分布を示すのに対し、形状名詞に関しては、保安語、東郷語、土族語とは明らかに異なり、達斡爾語とかなり類似した分布を示していることから、形状語全体として見れば、達斡爾語にほぼ近い特徴を有していると言える。
 4. 達斡爾語は、先の3で述べたように、中国領内のモンゴル系孤立諸言語の中では、東部裕固語に一番近い特徴を有するが、形状動詞に関しては、-ja- 形式が達斡爾語でかなり生産的であるのに対し、東部裕固語では非生産的である点、また形状名詞に関しては、-yai 形式が達斡爾語でかなり生産的であるのに対し、東部裕固語では化石的であるという2点において、両者は大きな異なりを示すと言える。また、達斡爾語を、モンゴル語・ハルハ方言等を始めとするモンゴル語中央方言と比較すると、両者の決定的な違いは、唯一形状動詞における -yana- 形式の有無、すなわちモンゴル語中央方言では、比較的多く用いられるのに対し、達斡爾語では、全く用いられないという点だけである。
- 以上の4点が本稿の結論である。

[参考文献]

中国領内のモンゴル系孤立的諸言語における形状語の語例に関しては、次のものを参考にし引用した。

- 保安語： 陳乃雄 等編 (1986)『保安語詞彙』内蒙古人民出版社 呼和浩特
 陳乃雄 編著 (1987)『保安語和蒙古語』内蒙古人民出版社 呼和浩特
- 東郷語： 布和 等編 (1983)『東郷語詞彙』内蒙古人民出版社 呼和浩特
 布和 編著 (1986)『東郷語和蒙古語』内蒙古人民出版社 呼和浩特
- 土族語： 哈斯巴特爾 等編 (1986)『土族語詞彙』内蒙古人民出版社 呼和浩特
 李克郁 主編 (1988)『土漢詞典』青海人民出版社 西寧
 清格爾泰 編著 (1991)『土族語和蒙古語』内蒙古人民出版社 呼和浩特
- 東部裕固語： 保朝魯 等編 (1985)『東部裕固語詞彙』内蒙古人民出版社 呼和浩特
 保朝魯、賈拉森 編著 (1992)『東部裕固語和蒙古語』内蒙古人民出版社 呼和浩特
- 達斡爾語： 恩和巴圖 (1983)『達漢小詞典』内蒙古人民出版社 呼和浩特
 恩和巴圖 等編 (1984)『達斡爾語詞彙』内蒙古人民出版社 呼和浩特
 恩和巴圖 編著 (1988)『達斡爾語和蒙古語』内蒙古人民出版社 呼和浩特
- モンゴル文語： Lubsangjab, Č. (1992) *Mongyul bičig-ün qadamal toli*, Ulaanbaatur
- モンゴル語 (ハルハ方言)： Шинжлэх Ухааны Академийн хэл зохиолын хүрээлэн (2008)
Монгол хэлний дэлгэрэнгүй тайлбар толь I-V, Улаанбаатар

さらに、モンゴル語の形状語に関しては、次の拙稿に基づいた。

- Badamkhand, Ya. (2008) 「モンゴル語の形状語の言語学的特徴について— 一部日本語のオノマトペと比較して—」『日本モンゴル学会紀要』第38号 pp.3-17
- Badamkhand, Ya. (2009) 「中世モンゴル語の形状語における若干の形態及び派生的特徴について」『EX ORIENTE (大阪大学言語社会学会誌)』Vol.16 pp.111-130

コーパスを利用した *OVER* の「完了義」の分析

大阪大学大学院言語文化研究科 博士後期課程1年

大嶋 ルリ子

1 はじめに

本研究の目的は、コーパスを利用した調査に基づき、*over* の「完了義」(例: *The game is over.*)の分析において先行研究に見られないデータを考察し、「完了義」の解釈において *over* が動機づけるものを明確化することである。

認知意味論においては、*over* の「完了義」は目標領域となる<事態の進行>という抽象概念を根源領域である<空間的な移動>という具象概念の観点から理解するメタファー表現と捉える考え方がある。従来の研究においては<行為>を含意する事態を対象とした分析に止まっているが、人間が事態と見立てるものは多様である。

本研究では、目標領域の事態には抽象度の高いものも多く概念化されることを指摘し、結論として、<事態の進行>を<空間的な移動>と概念化する際に、*over* は根源領域において『経路』を動機づけている可能性が高いことを主張する。

2 先行研究概観

2.1 Brugman (1981)-Lakoff (1987)

Brugman(1981)による最初の *over* の研究に改良を加えた Lakoff(1987)の研究では、中心的意義を *above* と *across* の意味要素の統合とし、*over* の意義をイメージ・スキーマで表し放射状カテゴリーを形成する動機づけを示した。

Lakoff(1987)は、*over* の「完了義」のメタファー的解釈に関し以下のように述べ、具体例として例文(1)を挙げている。

In general, activities with a prescribed structure are understood as extended landmarks, and performing such an activity is understood metaphorically as traveling along a prescribed path over that landmark. When one gets to the end, the activity is over.
(Lakoff 1987: 439-440)

(1) The play is *over*. (ibid: 439)

例文(1)では、トラジェクター(以下 TR: 参与者間の関係でより際立つもの)である、*the play* は構造を持つ活動であり広がりのあるランドマーク(以下 LM: 参与者間の関係で基点となるもの)であるとして見立てられる。劇を行うという行為(<事態の進行>)は経路に沿って旅すること(<空間的な移動>)であり、目的地、つまり劇の最後の時点がくると活動である劇が終わるとメタファー的に解釈できると主張される。図1は、スキーマ1(中心義)からの拡張義であるスキーマ1X.C.Eのイメージ・スキーマ構造を表したものであるが、例文(1)における *over* の「完了義」はスキーマ1X.C.Eのメタファー的拡張であると主張される。X、C、EはそれぞれLMの特徴規定を表す。



図1 スキーマ1X.C.E (ibid: 424)

その他の先行研究として Tyler & Evans(2003)があるが、やはり *game*, *film*, *the cat's play* など、<行為>を表すものを対象とした分析に止まっている。「完了義」において TR が表す事態は、

play のように「終了」を意識できる<行為>に関しては上記の解釈は当てはまる。しかしながら、Lakoff(1999:193)自身が指摘するように、イベント構造は<行為>以外の様々な側面を持つ。以下では、コーパスを利用して収集した用例を TR が表す事態に応じてカテゴリー化し、その特徴から「完了義」の解釈において *over* が動機づけるものを明確化する。

3 本研究の検索結果と分析

FROWN コーパスから *over* で検索した 1200 例のうち 47 例を、BNC 電子コーパスから [*be + over*] で任意抽出した 300 例のうち 190 例を、それぞれ「完了義」の分析対象とした。事態を表す TR を<行為><状況><時間>の 3 つのカテゴリーに分け、さらに各カテゴリー内を下位カテゴリーに分類し考察した。

3.1 事態が<行為>を伴うもの (76 例)

「会議」「演奏」など、開始と終了のある時間枠の中で人の行為を意識できるものが中心となるが、人の行為ではなく事態そのものに漠然とした始まりと終わりを意識するものや、人の行為ではなく物の動きに関わるものもある。事態が<行為>を伴うと捉えられるものを 5 グループに分類し、用例件数と具体例の一部を【表 1】に示す。

【表 1】主に<行為>を伴う事態

事態	典型例	件数	例
activity	1 play	29	game, swimming, circus, operation, experiment, meal
	2 battle	32	the Cold War, range war, barrage, black-mail, challenge
	3 work	7	daily toil, career, back-breaking part, role, support
	4 meeting	6	talk, seminar, presentation, campaign, court case
	5 movie	2	record play

【表 1】の典型例に示されているように、各グループは人の行為とその終了を意識できるものが中心となる。グループ 1 は日常的でより具体的な行為をイメージできるものとした。グループ 2 は非日常的だが行為を意識できるもので、*black-mail* のように継起的で終了が曖昧な行為も含む。グループ 3 では行為と終了を意識できるものと、*support* のように行為は漠然とイメージでき終了は曖昧なものに分かれる。グループ 4 では、*meeting* のように行為よりは開始と終了がはっきりした活動であると意識するものとしたが、*court case* のようにその意識の度合いが低いものも含む。グループ 5 は人の行為ではなく物の動きに関わり、終了を意識できる活動である。グループ 1 からグループ 5 にいくに従って、概念化される人の行為の具体性の度合いが低くなる。

- (2) The New York foreign exchange s took Mrs. Thatcher's remarks as a sign that the deep-seated split in her government over Britain's role in the EMS is healing and that the challenge to her leadership on this issue may be *over*.
- (3) ...and it's the authorized biography of Nelson Mandela of whom we are all very proud,... and we hope that this little token will be a kind of memento for all your support but by doing this I'm not saying that your support is *over* because the struggle continues.
- (4) But the hunting world won't comment until the court case is *over*.

例文(2)の TR, *the challenge* は、行為の継続性、あるいは継起性を意識させる。例文(3)の TR, *your support* は、漠然とはしているが行為とその継続性を意識させる。例文(4)の TR, *court case* は、継続性があり、終了は曖昧である。

従来の研究で指摘されているように、人間に関わる何らかの行為を事態と捉える場合、行為の終わりをイメージしやすく「完了」という意味要素と結びつけて概念化しやすい。しかしながら、

overを用いて「完了義」と解釈する場合、TRが表す事態は必ずしも行為を含意し終了を意識できるものばかりではない。むしろ、抽象度の高い状況や感情といったものが事態として捉えられる例の方が多く存在する。以下では、＜状況＞、＜時間＞といった、必ずしも人の行為を含意しないが「完了」したと概念化される事態の特徴を見ていく。

3.2 事態が＜状況＞を表すもの (111 例)

「最悪の状況」や「景気」「平和」など、主観的・客観的に意識する人を取り巻く状況や、「緊張」のように人の心の状態を表すものが中心となる。「協定」のように一定の期限を持つものもこのカテゴリーに含む。いずれも継続性や継起性が含意されていると捉えられる。事態が＜状況＞を表すと捉えられるものを4グループに分類し、用例件数と具体例の一部を【表2】に示す。

【表2】主に＜状況＞を表す事態

事態	典型例	件数	例
state	1 the worst	86	recession, bustle, crisis, trouble, danger, peace, marriage
	2 shock	8	torment, ordeal, scare, stress, surprises, loneliness, interest
	3 matter	6	problem, principle, decision, agreement
	4 dream	11	my usefulness, whole episode, Phil, you

【表2】のグループ1は「完了義」の用例の中で最も件数が多い。*recession*のように客観的に判断できる社会的状況と、*peace*のように個人の主観的判断によるものを対象とする。「完了義」において人を取り巻く＜状況＞が事態として捉えられる場合、悪い状況が終了するという傾向が強い。グループ2は人の心的状況を表すものとしたが、特に悪い感情を表すものが多い。グループ3は解決すべき、話題となっている事案を継続性のある一つの状況と捉えられるものとした。グループ4は抽象度の高い概念を対象としている。*Phil, you*のように人物に付加的要素が加わっていると捉えられるものも含む。グループ1からグループ4にいくに従って、＜状況＞と捉えられる度合いは低くなる。

- (5) He was not so simple as to believe that the danger would be **over** when Aldhelm went home frustrated, but what followed he would have to encounter and parry when it came.
- (6) But the loneliness appeared to be **over** when, in October, TODAY exclusively revealed she had wed husband number four during a trip to Norway where she was also reunited with Nicolas after 10 years.
- (7) ...so the old principle of nationality; the democratic, nay revolutionary principle of the unity, freedom, and self-determination of the nation, is **over** and done with...
- (8) If your figure could match the length of your tongue you'd be **over** in Hollywood.

例文(5)のTR, *the danger*は、継続性を含意した危機的状況と捉えられる。例文(6)のTR, *the loneliness*は、継続性を含意した心的状況と捉えられる。例文(7)のTR, *principle*は、特定の体制を一つの状況と捉えている。例文(8)のTR, *you*は、人物に付加的要素が加わった一つの状況と捉えられる。

継続性があると概念化できる状況については「完了」の意と結びつきやすいが、グループ3,4に見られるような事態については、他の要素によって「完了」が動機付けられていると考える。

3.3 事態が＜時間＞を表すもの (50 例)

「夏休み」「幼年期」など、時間枠を意識できるもの、特定の位置づけにより時間枠を意識できる「時代」や、「人生」のように時間枠が曖昧なものを含む。事態が＜時間＞を表すと捉えられるものを2グループに分類し、用例件数と具体例の一部を【表3】に示す。

【表3】主に<時間>を表す事態

事態	典型例	件数	例
time	1 summer	43	night, weekend, your holiday, babyhood, construction phase mating season, heyday, playtime, the rain, the time, his life employment, period of parental care
	2 era	7	era of free competition, age of the floppy-based network

【表3】のグループ 1は経験的に概念化できる時間の幅、つまり一定の「期間」と捉えられるものとした。グループ 2は、特定の位置づけがされている漠然とした期間とした。

(9) It is clear that an employee cannot be prevented from using his general skill and knowledge once employment is **over**.

(10) The era of free competition in the capitalist economy is **over** in all areas and in all respects.

例文(9)のTR, *employment*は、時間枠を意識できる「期間」と捉えられる。例文(10)のTR, *The era of free competition*は、漠然とではあるが一定の期間を表している。

4 議論

事態が「終了」「完了」という理解は、何を手がかりとして理解できるのか。<事態の進行>には必然的に<時間の経過>が含意されると解釈できる。では、その時間の経過は何を手がかりとして理解できるのか。抽象度の高い状況や概念を事態と捉えた場合、それらを<空間的な移動>と理解するための動機付けは何によってなされると考えるのが妥当か。

<移動>は経路を伴うが、be動詞が共起する「完了義」においては、他の要素、つまり *over* がその経路の意味を持つと考えられる。「完了」という認識は *over* が持つ経路の意味に動機付けられ、<空間的な移動>の観点から時間の経過、つまり<事態の進行>を理解できるものとする。

5 結び

コーパスから網羅的に用例を収集することで、「完了義」において先行研究に見られない多様なデータを考察できた。本研究における主張は次の2点である。

- ① *over* の「完了義」のメタファー的解釈における目標領域、つまり<事態>と捉えるものには<状況><時間>など抽象度が高いものが多く含まれ、行為や終了をはっきりと意識できるものから曖昧なものまで段階性がある。
- ② <事態>を<空間的な移動>と捉える時には必然的に<時間の経過>が含意されるが、抽象度が高い<事態>に<時間の経過>を意識できるのは、根源領域において *over* が『経路』を動機づけているからであるとする。

主要参考文献

- Brugman, Claudia. (1981) *Story of Over: Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon*. Berkeley, CA: UC Berkeley MA dissertation.
- Lakoff, George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. (1980) *Metaphors We Lived By*. Chicago: University of Chicago Press.
- (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans. (2003) *The Semantics of English Prepositions*. Cambridge: Cambridge University Press.

「私」が夢見るブリュッセル
—オランダ語メディアで語るブリュッセル市民のライフ・ストーリー分析—

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程1年

井内 千紗

1. はじめに

- ・本発表の目的：日常生活を通して市民がオランダ語で語る理想のブリュッセル像を探る。

- ・分析対象：ブリュッセル・デーゼ・ウェーク(Brussel Deze Week、以下「BDW」)紙連載記事“Wonen in Brussel(ブリュッセルでの生活)”¹
2005年4月2日から2008年11月29日まで連載(計177回)²

- ・アプローチ：各記事を質的分析³。定性的コーディングを行い、コードを中心に検討・分析する。

⇒オランダ語で発信される市民の「声」から、複雑な言語状況やグローバルな諸力が越境・定住するブリュッセル市民の生活とどのような影響関係にあるのか、また、都市コミュニティの一面を明らかにすることが可能となる。



写真：BDW紙“Wonen in Brussel”紙面(2007.10.11付)

2. ブリュッセルのオランダ語ローカル・メディア

- ・ブリュッセル：1989年からベルギー連邦構成体の1つに組み込まれる⁴。19の自治体([蘭]Gemeente/[仏]Commune)から成る2言語「地域」。

- ・ブリュッセル問題：重層的な連邦制に起因する、言語使用をめぐる制度的問題。

〔フランス語共同体：個人の言語の自由を主張
フランドレン：集団の権利の保障を要求〕

- ・オランダ語メディアネットワーク：FM Brussel(ラジオ局)、TV Brussel(テレビ局)、BDW紙(新聞)、brusselnieuws(インターネット)

→いずれも非営利組織であり、フランドレン政府から助成を受け運営している。

→BDW紙：週刊で無料。公共施設に配布もしくは定期購読を実施。発行部数：68,500⁵。

- ・政治家の言説：

(例) BDW紙特集“Het Brussel van mijn dromen(私が夢見るブリュッセル)”

(2009年8月11日から2009年9月3日まで、計5回)

¹ 実際には brusselnieuws<<http://www.brusselnieuws.be/>>に掲載されている電子データ版を扱った。

² 177回のうち、4回は同時に2人へのインタビューがなされていた。

³ 主に佐藤(2008)を参考にデータ分析を行なった。

⁴ 連邦(国家)、地域(フランドレン、ワロニー、ブリュッセル首都圏地域)、共同体(フランドレン共同体、フランス語共同体、ドイツ語話者共同体)の3つのレベルで政府が存在する。

⁵ <http://www.brusseldezeweek.be/fr-set.html>[2009.10.10]

⇒「1788年、ブリュッセル住民の95%がオランダ語話者であった。それがベルギー国家体制のおかげで1830年以後、とりわけ19世紀末以来、徹底的にフランス語化が進んだ。ここ10年の間にブリュッセルはそれでも多様な出自を持つ者がやって来る多文化都市にまで成長した⁶⁾。」

[Paul De Ridder・ブリュッセル議会議員・2009.08.28]

⇒「誰もが...な都市を⁷⁾」

3. 分析

3.1. 連載の概要

- ・インタビューの対象：
 - 181名（男性：114、女性：67）
 - 年齢分布（図1参照）
 - 職業：芸術、メディア関連の有職者、および退職者が主流（芸術、メディア関係：103名）
 - 出自：フランドレンからブリュッセルへ「移住」した市民、外国出身者、ブリュッセル出身者

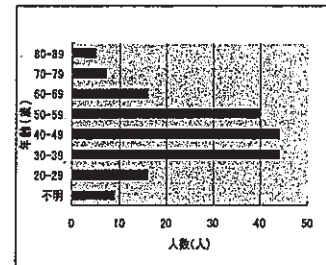


図1：インタビュー対象者年齢分布

- ・記者(Karel Van der Auwera)が毎回異なるゲストにインタビュー。
対話形式ではなく、市民の語りが大部を占めており、記者はインタビューの状況を描写する程度にとどまる。

3.2. ライフ・ストーリー分析

3.2.1. 分析結果

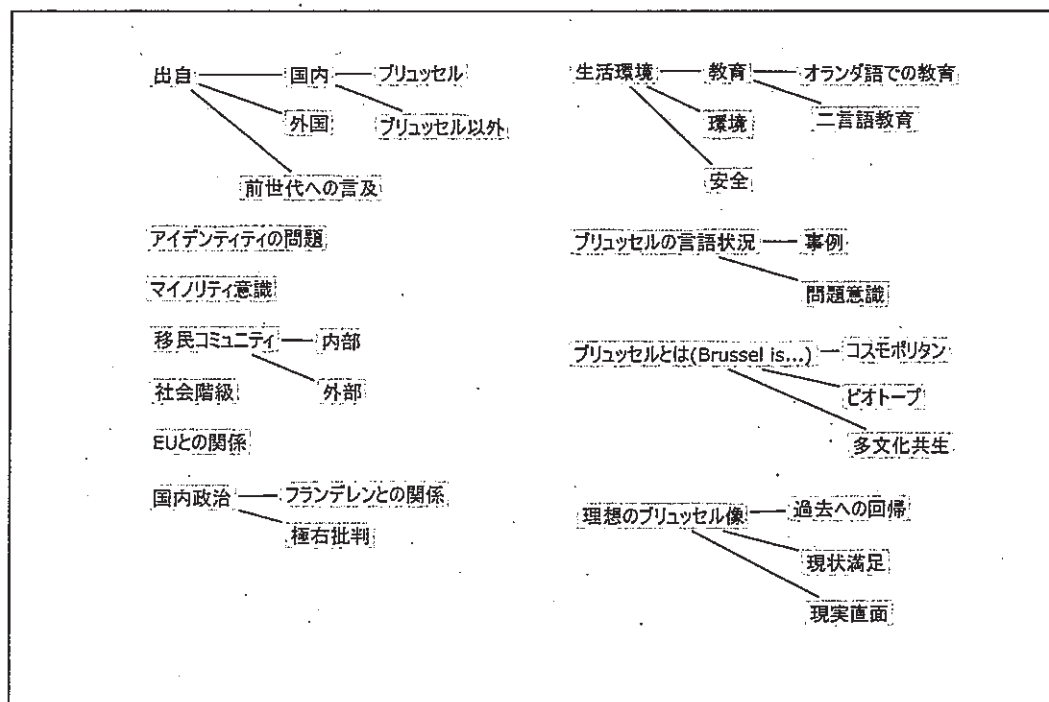


図2：コードのアウトライン

⁶ “In 1788 was 95 procent van de bevolking van Brussel Nederlandstalig. Na 1830 en vooral sinds het einde van de negentiende eeuw werd Brussel diepgaand verfranst door het Belgische regime. Tijdens de laatste decennia is Brussel evenwel uitgegroeid tot een multiculturele stad waar mensen van zeer diverse afkomst wonen.”

⁷ “Iedereen...”

3.2.2. 理想のブリュッセル像

① 過去への回帰：伝統的な村落コミュニティへの執着

<第57回> ...都市の大きな全体像のなかで小規模な生活に励まなければならないと思います⁸。

[Barbara Van der Wee・女・48・建築家・2006.05.25]

② 現状満足

・ 完璧な妥協

<第42回> フランデレン人としてでもここではマイノリティとなります。あなたは都市全体の一部に過ぎないのであって、私にはそれが居心地がよい。...私はフランス語で会話することはできるが、議論にからむことができません。...しかし、私のフランス語力が向上しただけでなく、ブリュッセルのフランス語話者はオランダ語を尊重するようになったと感じます。私も店の人がオランダ語を習得していないと察するとフランス語を話す努力はしません。ギブアンドテイクです。嫌悪感があれば、問題は発生します⁹。

[Tim Dirven・男・37・写真家・2006.02.06]

・「個」の集合、混交を志向

<第22回> ブリュッセルは誰のものでもありうるということにも満足するでしょう。偏見のない都市であり、そこでは人々があらゆる方向へ行き交います。どこから来たかで判断されることはありません。それは良いことで、私は誰もが「これは私のものだ」と言うような都市が好きではありません。ここからさらに本当の混交が始まります。チャイナタウンやリトルイタリーはここにはありません。異文化間の固い結びつきというものは存在しないかもしれませんが、ここはイスラエルの例よりも健全です¹⁰。

[Raven Ruëll・男・27・劇場勤務・2005.07.23]

③ 現実直面

・ 制度と言語状況のずれを指摘

<第87回> ブリュッセルは想像できないほど最高にコスモポリタンな都市です。しかし、言語のような根本的なものはその多様性に追いついていません。あまりにも多くの住民が2つの共同体いずれかの型にはめられています。フランデレンのアイデンティティ、フランデレンのルーツ、それは私には異質なものです。私にとって言語はコミュニケーションの手段であり、たまたま自分はオランダ語が母語だったというだけです¹¹。

[Sandra Fol・女・36・オーケストラ関係・2007.01.20]

⁸ "...vind ik dat we het kleinschalige leven binnen het grote geheel van de stad moeten cultiveren."

⁹ "Als Vlaming ben je hier ook in de minderheid. Je bent slechts een deeltje van het geheel en ik voel me daar goed bij. ...ik kan een conversatie voeren, maar ik kan geen discussie aangaan. .. Maar niet alleen ik ben geëvolueerd, je voelt dat hier bij de Franstaligen het respect voor het Nederlands groeit. Ik maak er ook geen punt in de winkel Frans te spreken als ik voel dat ze het Nederlands niet machtig zijn. Het is geven en nemen; als je daar een aversie tegen hebt, dan heb je inderdaad een probleem in Brussel."

¹⁰ "Je voelt ook goed dat Brussel van alles en van iedereen kan zijn, een stad met een open geest, waar mensen uit de vier windstreken komen en gaan. Je wordt er ook niet op beoordeeld of je van hier bent of niet. Dat is goed, ik hou niet van steden waar iedereen zegt: dit is van mij. Het begint hier bovendien een echte mix te worden, je hebt geen Chinatown, je hebt geen Little Italy. Er is misschien wel niet het hechte contact tussen de verschillende culturen, maar het is wat dat betreft hier toch gezonder dan bijvoorbeeld in Israël."

¹¹ "Brussel is de meest kosmopolitische stad die een mens zich kan inbeelden, maar iets zo fundamenteels als taal volgt die diversiteit niet. Er zijn nog steeds te veel inwoners die zich in een van de twee gemeenschappen ingraven. De Vlaamse identiteit, de Vlaamse roots, het is iets wat mij vreemd is; voor mij is taal een communicatiemiddel, en toevallig is Nederlands mijn moedertaal."

・多文化共生に対する問題意識

<第91回> 私は国内で autochtoon 住民がうまく代弁されていないようなところには住みたくありません¹²。

[Nazife Can・男・42・画家・2007.02.16]

<第18回> ...私はスハルベークの大部分が完全に allochtoon になってしまったことを残念に思います。普通に混住しているほうがよっぽどおもしろいです。かつてベルギー人が少しずつ私たちの街、地区から去っていくのを見てきました。...彼らの家は allochtoon に売り渡されました。このことは彼らが故国に戻らないのだと実感させられます¹³。

[Willy Courteaux・男・81・退職者・2005.08.11]

4. autochtoon と allochtoon から成る都市ブリュッセル

・選択的な居住が可能な市民という位置からブリュッセルでの生活が語られている。その背景としてブリュッセルの都市ばなれ(stadsvlucht)、オランダ語話者の減少という問題意識が連載の根底にあると指摘することができる。

・ローカリティを志向するにあたり、autochtoon および allochtoon と、自己/他者を決定づける言葉の使用が市民の間で浸透している。これらの概念は帰属への固執から来るものであり、グローバル化のプロセスと表裏をなしている(Ceuppens et al., 2005:386)。

5. まとめ・今後の課題

・ブリュッセルにおいて、誰もがマイノリティでありうるという日常経験から、文化多様性や混交が理想的であるというディスコースが BDW 紙では成立している。

・本分析を都市コミュニティの考察へと発展させるには、ブリュッセルにおいて autochtoon および allochtoon という概念が他の言語でも通用しているのか、またどのように捉えられているのかも併せて探る必要がある。

参考文献

佐藤郁哉 (2008)『質的データ分析法—原理・方法・実践—』新曜社

広田康生 (2003)『エスニシティと都市 (新版)』有信堂

Ceuppens, Bambi and Geschiere, Peter (2005) "Autochthony: Local or Global? New Modes in the Struggle over Citizenship and Belonging in Africa and Europe", *Annual Review of Anthropology*, October 2005, Vol. 34, Pages 385-407.

Ceuppens, Bambi (2006) "Allochthons, Colonizers, and Scroungers: Exclusionary Populism in Belgium", *African Studies Review*, Volume 49, Number 2, pp. 147-186.

Janssens, Rudi (2001) *Taalgebruik in Brussel. Taalverhoudingen, taalverschuivingen en taalidentiteit in een meertalige stad*, Brusselse Thema's 8, VUBPRESS.

Janssens, Rudi (2008) "Language use in Brussels and the position of Dutch. Some recent findings", *Brussels Studies*, Issue 13, 7 January 2008.

Van Parijs, Philippe (2007) "Brussels Capital of Europe: the new linguistic challenges", *Brussels Studies*, Issue 6, 3 May 2007.

¹² "...ik zou nergens in dit land willen wonen waar de autochtone bevolking niet goed vertegenwoordigd is."

¹³ "Spijtig vind ik dat een groot deel van Schaarbeek puur allochtoon is geworden. Een gezonde mix zou veel leuker zijn. Ik heb indertijd al de Belgen geleidelijk uit onze straat, uit onze wijk zien wegtrekken. ...Hun huizen hebben ze verkocht aan allochtonen, die tot het besef waren gekomen dat ze toch niet meer zouden terugkeren naar hun thuisland."